

この世は今日も愉快か
な

上条信者

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

あなたが私にくれたから、私のあらん限りのモノをあなたに還すよ。

想いも、言葉も、力も、あなたがどこまでも飛べるように。

だから受け取って。あなたが居た世界を、愛した唄だから。

目次

あなたへ贈る恋〜ジャーマンアイリス〜	1
あなたの運命〜ニシキギ〜	9
かくも炎がごとき輝き〜アンスリウム〜	24
かくも炎がごとき輝き〜アンスリウム〜	39
かくも炎がごとき輝き〜アンスリウム〜	55
心を澄ませて〜ウメノハナ〜	76
幸せな思い出〜ネリネ〜	99
その芯の強きかな〜サギソウ〜	113

世は無情〜アジサイ〜	134
燃えよ愛〜ミズタガラシ〜	155
燃えよ愛〜ミズタガラシ〜	173

あなたへ贈る恋々ジャーマンアイリス

さて、もしもの話をしよう。

君は一般人だ。特筆した経歴は見当たらず、しかし君はかけがえのない日常を謳歌していた。

両親は君を愛していたし、君も両親を愛していた。友人と呼べる程親交を持った知己と充実した青春時代を共に過ごした。

平凡だが、すばらしいと、幸せだったと君はひそかに満足した人生を送っていたと自負していた。

そんな君に一つの転機が現れた。

君が過ごした人生の中ではありうべきでない、世にも名状しがたき常識とは掛け離れた出来事だ。

一部界限ではそれを題材にした小説や二次創作が溢れている。

世に言う「転生」と呼ばれる超常的で理解しがたい現象だ。

その表現は様々だ。神と呼ばれる存在に出会った後で、反則じみた「能力(ギフト)」

を受け取ってしまったたり、突然訳も解らずに気付けば見知らぬ場所に置き去りにされていたり、あるいは「リセット」と言うべき状況に陥ったり・・・。

ともかくそれらをきっかけに、彼あるいは彼女は二度目の人生を歩むという物語が始まるわけだ。

意気揚々と「原作」と呼ばれる世界へ干渉すべく行動するかもしれないし、危険と関わるべきでないと再び平凡にひっそり過ごすかもしれない。

それらは自由だ、どのように過ごしてもそれは彼等の人生であり、選択した結果なのだから。

しかし総じて彼等に言えるのは、もはや彼等は「正気」や「普通」とは無縁だということだ。

世界を越えた代償なのか、それとも別の何かの作為によるものか、いつそ清々しいまでに「常識」と呼べる行動とは足掻けば足掻く程かけ離れて行く彼ら。

逃れられぬ、運命に引き込まれていく。

そんなどうしようもない物語だ。

そうして元・彼あるいは彼女は彼女は「世界」へと生まれ落ちた。

何を成すのも自由だ。前世の記憶を得ていようが、「原作」の知識を持ち合せようが、所詮それは人生の土台でしかないのだから。

“何”を成すのか？チート？内政？ハーレム？俺TUEEE？

可能かもしれない、不可能かもしれない。しかしそんなことはやってみなければわからない。

なぜならそこは、かつて夢見たかもしれない創作世界なのだから。

そして彼あるいは彼女が、“世界”と自身の異常を認識した時、初めにこう思った。

「なんかすごいことできる気がするー！」

彼あるいは彼女の元の思考が平凡だったかは、今となつては知る術はない。



人生はおもしろい。素直にそう思う。

空は青いし、星は輝くし、太陽は暖かくて、季節は巡る。それら全てが緻密に計算し尽くされたがごとく、しかし全くの無作為に自然と存在している。

そんな地球と呼べる惑星に生まれ、人間という生き物として、私はここにいた。

「……………」

見上げると吸い込まれそうな程綺麗で、だけどそこには無慈悲なくらい生き物がいない蒼穹の世界。

ただ見上げているだけで、自分という殻を投げ捨てて、どこまで飛んでいってしまいたいような気分になる。

無性に手を伸ばしてみるが、その差は少しも埋まらない。

どこまでも永く続く、その先に広がる無限の宙。

「…………ツ…………ツ」

もう少しで届きそうなの、そんな気がしてしまうから。背を伸ばして、両手をいっぱい広げて、つま先で立ち上がる。

しばらくそうやっていると、そこは遠い場所なのだという現実を理解してしまう。

諦めて背伸びをやめてしまう。だけど、どうしようもなく見上げてしまうのだ。

—この世界（…………）の事を知る私が、ここじゃないどこかへ憧れてしまうから。

「……………」

そろそろ朝日が昇る。今日から私はこの世界で最も重要な兵器（…………）を学ぶ為の学園のある、かつて前世と言える過去の故郷である日本へ行く。

曖昧な、自分の名前すら解らない不可思議な夢と大差のない知識だが、だけど確信を持っている、私はかつてここじゃないどこかに居たと。

『超人（ツアラストウラ）—実験個体（ファゾスティア）—20番（ツヴェルフ）』、また一屋上（…………）に居たのか」

「……………」

振り返ると、—自分の飼い主（・・・）である研究所の担当研究員の一人が立っていた。

「今日から日本へ異動になる、準備は済んでいるのか？」

「……………」（コクツ）

“ I S による人間機能の拡張及び可能性の模索 ”、それが私に与えられたこの世界での存在理由だ。

I S、正式名称インフイニット・ストラトスと呼ばれる宇宙空間での活動を想定、開発されたマルチフォーマル・スーツである。

従来の兵器を凌駕した “ 白騎士事件 ” を発端に、急速に各国での兵器としての研究、開発の進められてきた、パワード・スーツとしての側面もある。

コアの生産方法、全容の詳細は未だブラックボックスであり、篠ノ之（しのの）東（たばね）博士が生産を中止した時点での467機を絶対数とし、アラスカ条約による I S の運用協定や取引の規定、技術共有化などの国際法を制定したことによって、大小国問わず抑止力として I S を保有することになった。

私の産まれたここは、そんな I S を保有することができた研究所の一つだった。

産まれたその時から訓練を受けたきた私は、研究目的にも重要な存在だったらしく、

かつてここに居た数多くの実験個体だった姉妹達は、私の実験結果による数値を大きく下回った。

費用を対照実験に使うより、私に集中的に運用する方が有益と考えたのか、気付けば私はたった一人でこの研究所に留まることになった。

彼女達がどうなったかは知らない。唯一家族と呼べる彼女達が居なくなったことはショックだったが、それも実験と管理し尽くされた生活の中で薄れていつてしまった。

「そうか、ならば最終調整と『首輪』の設定を行う。0730までに私の所までこい。IS学園では私達の干渉は難しくなるからな、少々規定の一洗脳（プログラム）を書き替えておく」

「……………ッ」

私が頷くと、研究員はそのまま黙って去っていく。

特に疑問に思ったことはなかったが、彼はこちらを見る時僅かに困惑が混じるようだ。表面上まったくの無表情だったが、微かに一柑橘類（こんわく）の臭いが感じられた。

前世では味わったことの無かった感覚。

超人覚醒実験によって産まれた、超能力と呼ぶべき異能。

『共感覚』というらしいが、詳しい事は教えて貰っていない。

私の見える世界は少し不思議だ。相手が何を考えているのか、記されている文字の真意、場の雰囲気、それらが“色”や“におい”などで直感的に知覚される。

例えば食事の際に含まれた薬物が“赤く”視えたり、人の行動を視覚せず匂いで判別したり、何かしら別の一情報（ちかく）が与えられるのだ。

「……………」

私はもう一度空を視る。

それはこの世界に産まれた時から視ている空で、前世では解らなかつた空のカタチ。

“冷たい”。だけど透き通るような“清涼な匂い”。どこまでも聞こえる“旋律”。

それが私の景色。この世でたった一人だけの世界。

与えられる僅かな自由時間を、私はこうして世界を感じて過ごしていた。

研究所で得られるのは無機質でどこか狂気に満ちた黒に近い“灰色”。陰鬱とした閉じられた世界、産まれてからの全て。

「……………」

生まれ付き声のでない喉を摩る。伝えたい言葉も、訴えたい想いも、今のところ無いから不便はしていない。

でも、何となく悲しいかもしれない。

「……………ツ……………ツツ」

声を出そうとしても、吐き出す息が掠れた音を響かせるだけだ。

「ツーーーー…………ツーーーー…………」

叫び続けた。

遙か遠くの、未だ自らの運命に気付かぬあなたへ。

“物語の主人公”へ、私の事に気付いて貰えるかもしれないから。

会いたい——会いたい——あなたに会いたい——

わたしを、すごいところにつれて行ってほしい。

あなたの運命くニシキギく

「……………」

どうしてこうなったのだろうか？

この光景を見ると否応にも自らの境遇を自覚してしまう。

登校のための通学路は、見渡す限りの女子、女子、女子……。

そして皆が足を進めるその先には、何とも見慣れない様式の高塔や、ここは日本かと疑いたくなるような未来的な設備の数々。

本当に自分はここに来てしまったんだなあ、妙に諦めの悪い事まで考えてしまった。

それもそうだろう。

普通考えられるか？今まで女性以外動かすことができないと言われていた代物を、まさか何か悪い夢としか思えないような偶然で動かしてしまうなんて……。

昨今の日本警察の信用度くらい信じられない話だ。

おかげでここ数週間はいろいろと大変だった。要人保護プログラムなんてものを適用されたり、毎日何かしらの記者だかジャーナリストだかパラッチだかが押し掛けて

きたり、そして――。

「ねえーあれって……」

「男の子だよね……」

「もしかしてあれがこの前テレビでやってた……」

「……勘弁してくれよ」

世界で唯一、IS——インフィニット・ストラトスの為の教育機関であるIS学園に通わされることになったり……。

（ほんと、どうしてこうなった……）

神の意志か？ 運命か？ それとも誰かの思惑で？

どちらにしろ、この珍獣を観察するような視線にさらされるといって一種の羞恥プレイを作為したのだとしたら、俺は迷わずそいつらに中指を立ててやる。

誰とも視線をかち合わせないように、若干上向きに空を恨めしそうに見ながらこの状況に耐えた。

これがこの先続くのかと思うと、少し憂鬱と不安に満ちた学園生活になりそうだと溜息を吐いた。

俺、織斑一夏に明日はあるのか？

「……………ッ」

「んん?」

視線を感じる。いや、視線ならそこからバリバリ感じるんだがこれは違う。

具体的には距離が、これはむしろ視線と言わず気配と言ったほうが正しい気がする。ともかく俺の後、……しかもかなり密着した距離に誰かいる……!

「……ッ……ッ」

「ちよっ!?」

顔の脇から手首が伸びてきたかと思うと、いきなり頬を軽く触られた。

俺は驚いてその場から跳び退き、若干の恥ずかしさといきなり触れたことによる怒りから、相手の顔を確認する為に振り返った。

「誰だ!」

「……ッ!」

……女の子だった。

ここがIS学園である以上それは当然の事なのだが、彼女を見た瞬間、それまで見てきた女性とはまるで違う印象を受けた。

腰まで伸びた少し色素の抜けた薄い金髪、閉じられた瞼、顔立ちは整った細い造形をしており、小ぶりでぷつくらとした唇は何かを言い掛ける直前のように開かれていた。

存在感というか、雰囲気というか、とにかく一目見ただけで「儂い」と思ってしまう

容姿だった。

今まで自分の周りに居た女性を思い返して見ても、皆強いとか勝ち気とか、とにかく振り回されるくらいの快活さを持ち合わせていたので、こういう今にも消えてしまいうな静けさを持った女性は初めてだった。

文句の一つでも言つてやろうと思つていたのに、彼女を目の前にして怒りが急速に萎んでいく。

それでもいきなりの行動に対する疑問だけでも聞いておこうと、少し控えめに話しかけた。

「あー、えっと、俺になんか用があつたりするのかわ？」

「…………ツ」

「え？　上？」

制服からしても女生徒であろう少女は、ほっそりとした腕を上げて上空を指差した。そこには快晴とは言えないが、白い雲がまばらに漂う程度なので十分晴天に分類してもおかしくない空。

洗濯物を干すには絶好の日和と言えるだろう。

…………だが少女の意図がまったく読めない。

「空がどうかしたのかわ？」

「……ッ」

「俺？」

「……ッ！」

少女は今度は俺を指差した。

空を指差した後は、……俺？ いったいどういうことだ？

……むむむ、さっぱりわからん。

「……すまん、お前の言いたいことが解らん」

「……」

「うっ……！ あ、ちよつと待て！ 今考えるから！」

目に見えて残念そうに少女の肩がハの字に下がり、唇もまげて俯いた。

その様子に妙な罪悪感が沸き上がり、俺は必死に頭を捻って答えを探す。

……空の次に俺を指したことは、俺と空になんか共通項でもあるのか？

「……もしかして、俺と空が似てるって言いたいのか？」

「ッ！」

バツと顔を上げて必死に頷くところをみると、どうやら正解らしい。

今にも跳びあがらんばかりの嬉しさを全身で表現しており、その様子に苦笑が漏れ

た。

ふと通学路に備えつけられた時計が目に入った。針は遅刻まであと数分を指しており、あれほどまでに感じていた視線はいつのまにやらさつぱり消えていた。

まずい……！ 登校初日から遅刻とか洒落にならない！

「じゃ、じゃあ！ 俺もう行くから！ お前も遅れないようになー！」

「……ッ」

鞆を脇に抱えて急いで校舎に向けて猛ダッシュした。

後ろを振り向いてみると、少女はこちらに向けて小さく手を振る様子が見て取れた。

いや、お前もここの生徒なんだよな？

そのあまりのマイペースっぷりに少し呆れて肩の力が抜けた。

——またね

「えっ?」

声が聞こえた気がした。

聞こえたのは一瞬だけで、しかもかなり小さな声だった。

足を止めて振り返ってみたが、そこには少女の姿は無かった。

「気のせい、か?」

後ろ髪惹かれるような感覚はあるものの、やがて目的を思い出した俺は再び校舎へと

走りだした。

「あ、名前聞くの忘れてた」

途中でそんなことを思い出したが、あれほど独特の雰囲気があればすぐ見つかるだろうと思ひ直した。

先行き不安な俺の学園生活の初日は、そんな感じで始まったのだった。

★

久しぶりに訪れた日本。

自分がどのような場所に住んでいたかかどうかは覚えていないが、やはり妙に馴染む気がした。

優しい青だ。この国の人達は「受け入れる」ということで自分たちの文化を発展させてきた。その氣質が見て取れる、安心させてくれる色。

しばらく歩くと、ちらほらと別の色も混ざり始めた。

どうやらIS学園に敷地内に入ったようだ。

視覚を断っているから気付かなかった。

共感覚シンパシーはオンオフの切り替えができないので、必要な時以外で余計な情報によって脳プログラムに負担を掛けないように洗脳されているのだ。

しかしそれ以外の感覚が十分に補ってくれるので、人の判別や障害物への対処などは問題ない。

目を閉じた状態では空を眺める事はできないのが残念だが、こうして研究所では味わえなかった色彩を感じることができのには感動した。

「……ッ！」

あの娘は青いけど、紅の混ざった綺麗な青紫だ。あつちの娘は一見黄色で、だけどその内にはちゃんと青が見え隠れしている。

知らなかった色、研究所の人達とは違う色、私がこの世界に来て初めて感じたもの。もつと覗られるだろうか？ もしかしたら彼の色もこんな風な色なんだろうか？

「……ッ！ ……ッ！」

楽しみだ。私は楽しんでる。

もし声が出せるなら歌い出しているかもしれない。きつと頬が緩んでいるのは隠せていないだろう。

「～♪ ～♪」

軽く鼻歌？ のようなものを交えながら私はこれから三年間通うことになる道をゆつくりと歩いていった。

「～♪

？」

ちらりと、他とは違う色が視えた。

周りに紛れて、どこか見覚えのある色が。

どこまでも捉えられない、永く続いていくようなあの色は

「ッ!!」

確かめなきや。

そう思つて衝動的に走りだした。

「あ——」

遠くにあつたその色が、他の色に紛れて隠れてしまう。

言いしれない不安と焦りがジワジワと心を締め付けてくる。

「あつ! あつ!」

叫んで呼びとめようとしても、漏れる声は音として機能しているかどうかも怪しい。

「ッ!」

見つけた。もう少し、もう少しだ。

やっぱり、間違いない。あの色だ。

ずっとずっとと視てきた、私だけが視てきた。綺麗な綺麗な、空の色。

それが目の前にある。

もしかして、

(この人、だ?)

多分そうだ。だって違う、こんなにかくさんの色の中でたった一人だけだ。

でも、本当に?

この人があの「織斑一夏」なんだろうか?

もう触れられるほど近くにいる。

(確かめなきゃ……)

そして、触れた。

(あれ……?)

どこまでも永く続く、だけどそこには生き物の存在しない空。

(冷たくない……? ううん、これは……暖かい?)

一目見ただけでは気付かなかったこと、触れてみて解ったこと。

似ている、だけど違う。

こんなにも似ているのに、そのはつきりとした違いが私の好奇心を刺激した。

(知りたい)

もつとこの色を

「誰だ!」

「…………ツ」

あ……、「怒り」だ。そんなに強くないけど、怒らせちゃった。

その事実が身体を少し萎縮させるが、それでも相手の目線から目を逸らせなかった。ほんの少し混ざった赤色は、原色の上にあつても映えるように一筋の線を露わにしていた。

その様はとても綺麗で、それが怒りである事が解つていても目を逸らすことができなかったのだ。

赤は一瞬にして消えて行つたけど、その一瞬がさらに私の興味を引いた。

そして確信する。どうやら「彼」で間違いないようだ。

「あー、えつと、俺になんか用があつたりするのか？」

困つたような控えめな声で彼がそう言う。

えつと、こんな時はなんて言えばいいんだろう？

と、とにかく説明しなくちゃ！

「…………ツ」

「え？ 上？」

空が彼に似てて、彼が空に似てるんだから…………！

「空がどうかしたのか？」

「…………ツ」

「俺？」

「…………ツ！」

伝わったかな…………？

「…………すまん、お前の言いたいことが解らん」

「……………」

やっぱり、声に出さないと伝わらないのかな…………？

そうだよね、当たり前だよね…………。この世界に来て初めて、自分の気持ちが伝わらないということにシヨックを受けた。

姉妹達は程度の差はあれど覚醒実験によって能力を得ていたことに加え、遺伝子が同じだということもあつたのだろう、皆がお互いに通じていた状態だった。

だからみんながいなくなつて、私一人だけが取り残された時、言いしれない不安に襲われたのだ。一人だ、この世界でたった一人という孤独だ。

そう思うと、今まで感じていた感動が絶望に摩り替つた。

一人なの？ みんな優しいのに、誰も私ことを解つてくれないの？

その事実思わず身体を掻き抱きそうになつた時、慌てたような彼の声が聞こえた。

「うつ…………！ あ、ちよつと待て！ 今考えるから！」

えっ……？

彼は腕を組み、額に皺を寄せ、身体を少し揺らしながら考え込み始めた。

考えてる？ 私のことを……？

その様子に戸惑っていると、やがて確かめるように彼は言った。

「……もしかして、俺と空が似てるって言いたいのか？」

「ッ！」

伝わった！ 解ってくれた！

身体の内側から言いしれない何か大きなものが沸き出して来るのを感じる。

姉妹が居なくなつて久しく感じてなかつたそれが、喜びという感情であることを思い

出した。

抑えきれないその感情のままに首を必死に上下に振る。

今度は何を伝えよう？

そう思考を巡らせてみるが、浮かんでは消え、浮かんでは消えを繰り返し、中々考えが纏まらない。

そうしている内に、彼の慌てた声に意識を戻される。

「じゃ、じゃあ！ 俺もう行くから！ お前も遅れないようにな！」

待つて、そう伝えたくなつた。

もつと解つて欲しい、ずっと前から伝えたいことがあるの、あなたの色を魅せてほしい。

……でも困らせちゃ駄目だ、我慢しなくちゃ。

まだ時間はあるんだから、ずっと会えないって訳じゃない。

だから頷いて、彼の背中に小さく手を振る。

一度だけ彼が振り向いた。次会った時、彼は私の事を覚えていてくれるだろうか？

楽しみ、だけどちよつとだけ不安だ。

「……ッ」

そうだ、職員室に行かなくちゃ。

私の正式入学の為には確かそういう手続きが必要だったはずだ。

自慢じゃないが私の研究内容はともかく、実験内容はまともとは言えない。

世間的には研究成果の流出と、対外的なプロガンダがあるとはいえ、怪しい実験をしていることは隠しようがない。

だから彼の姉である彼女に警戒されることは当然の流れだと言えるのだろう。

遠ざかつて行く彼の色を追いながら、別れ道へと歩を進める。

完全に確認できなくなるその前に、伝わるかどうか解らないが、万感の思いを込めて呟いた。

その後朝礼での紹介であっさりと再開することになるのを、彼等はまだ知らない。

まだ運命^{さだめ}は、僅かばかりの猶予を残していた。

世界でたった一人の男性 I S 操縦者である彼と、世界でたった独りの転生者である彼女の物語は、まだ始まったばかりだった……。

かくも炎がごとき輝き～アンスリウム～ 1

「げえ!? 関羽!?!」

「誰が三国志武将か」

バツシーン!

「ツ!?!」

彼の声が聞こえたと思ったら、その直後ものすごく痛そうな鈍い音が響いた。廊下からもしつかりと確認できたその音に思わず身体を竦めてしまう。

「なんで千冬姉えがここに……!」

「学園こじでは織斑先生と呼べ、バカ者」

ゴスツ!!

「ツ!?!」

今度は痛そうでは済みなさそうな衝音だった。

どうやら織斑先生が教育的指導を行ったらしい。

さつき話した時はちゃんと厳しいけど優しい色だったのに、もしかしてあれは錯

覚だったのだろうか?

そうなると僅かな粗相でも仕出かそうものなら、ただでさえ洗脳で負担を患っている私の頭ではこの先生き残れるのか？

いや、そもそも私なんか彼女の教育的指導に着いていけるのか？

ああ、そう考えると私はとんでもない所に来てしまったのではないかもしかしたら彼と仲良くするだけであの驚異的な握力で私の頭はパーンされていや握る余地もなくデコピンだけでも十分私の頭蓋を粉碎して私という命が脳しようと共に飛び散って――

「……………何をしている、早く入れ」

「――ツ!!」

あわわわわわわわ、さっそく迷惑掛けちゃった！ このままでは私の学園生活が惨劇と共に終結してしまう！

ご、ごめんなさいごめんなさい許してくださいまだ死にたくないですごめんなさいごめんなさい！

「ツ！ツ！ツ！」

「……………本当に何がしたいんだお前は」



「さて、それでは最後に諸事情によって、今日から諸君らと私の教鞭を受ける事になった生徒を紹介する」

千冬姉えがここの教師だつてことも驚いたが、千冬姉えの隣に見覚えあり過ぎる少女が立っていたのにも驚いた。

また会えるだろうとは思っていたが、まさかこんなにも早く再開することになるとは。

「……ではエレフセリア、自己紹介しろ」

「……ッ！」

薄いがそれでも映える金髪に、閉じた瞳、ほっそりとした小顔、そしてピンクの瑞々しい唇。

間違いなく今朝の通学路で出会った少女だった。

IS学園の生徒で、しかもクラスメイトだったとはなあ。

こんな偶然は中々無いんじゃないだろうか？

千冬姉えの声に若干緊張した面持ちでディスプレイにカタカナで自分の名前を記入していく少女。

“クルヴィ・エレフセリア”か、どこ出身なんだろうか？

うーん、外国人は見分けが付きにくいんだよな。

「……ッ！」

クルヴィは一度頭を下げ、今度はスカートのポケットから用紙を取り出すと、おずおずと副担任の山田真耶先生に手渡す。

何をするつもりだろうか？

そういうえばあの時から一言も喋ったとこ聞いてないけど、それと関係があつたりするんだらうか？

山田先生は笑顔でそれを受け取り、丁寧に広げながら落ち着かせるように一度クルヴィの肩に手を置いた。

少し驚いた様子だったが大きく何度か深呼吸し、胸の前に腕を持っていった後山田先生に頷き返す。

山田先生はそれを確認した後、ゆっくりとおそらく用紙に書かれたであろう内容を朗読し始めた。

「こんにちは皆さん、私の名前はクルヴィ・エレフセリアです」

それに合わせ、彼女が腕を細かく動かし始める。

ゆっくり区切られる朗読に合わせ、一つ一つ確かめるように動かされるそれは、テレビなんかで視た事ある手話と呼ばれる会話手段だった。

「私は生まれ付き声が出せません」

山田先生の言葉に、納得がいった。

極端な引つ込み思案でない限り、あそこまで徹底して喋らないなんてことはないだろう。

好奇心からか教室を巡っていた小声での会話が、突然の事実を告げられたことによつてピタリと止んだ。

「限られた時間しか目を開けられません」

ドキュメントなんかで身体にハンデを持った人に密着した番組を見た事があるが、実際目の前にしてみるとどうも少し戸惑ってしまう。

でも俺はそれをすぐに恥じる事になった。

「だけど私には皆さんと同じように歩ける足があります。物を掴める手があります。会話する手段があります。私は皆さんと少し違いますが、皆さんと同じことができませす」

おそらく一生懸命覚えたのだろう。

途中で動きが止まってしまうこともあった。

しかし自分のことを伝えようと、緊張で額に汗を滲ませるその必死な姿に、先程までの戸惑いは消えていた。

「私は学校に通ったことがありません。友達を作ったことがありません。だけど、私は皆さんと仲良くなりたいです。一緒に勉強できてうれしいです。だからどうか、これからよろしくお願いします」

最後にニツコリ微笑みながら、もう一度ペコリと頭を下げた。

『……………』

誰も口を開けなかった。

初めは身体機能の欠如という違和感があっただろう、しかし何も変わらないのだ。

身体機能が不全であるということは個性の一つなのだ、彼女は俺達と同じ年頃の少女で、同情など挟む余地がないくらい屹然とした態度でそれを示した。

だから俺はなんの気負いもなく、無意識に拍手を送っていた。

ようこそ、こちらこそよろしく。

そう想いを込めて。

パチパチ……

パチパチパチパチ……

パチパチパチパチパチパチ……!!!

やがて拍手の輪は広がり教室全体を包み込んだ。

皆が受け入れたのだ、彼女を自分たちの級友として。

IS学園でただ一人の男子という立場による不安は、少しか拭かれた様な気がした。

少なくとも、ちゃんと接すれば受け入れて貰えると解った訳だし。

「よし、挨拶は済んだな。エレフセリア、お前の席はあそこだ」

千冬姉えが僅かにほつとしたような息を漏らした後、拍手を中断させてクルヴィに席に着くように促した。

どうやら心配していたらしい、それを表に出さない辺り千冬姉えらしいが。

大きく頷いて、自分の席に着くまでに一人一人に頭を下げて行った彼女を微笑ましそうにみていた山田先生が、元気な声でSHRの終了を告げた。

★

「ねえねえクルルーー！」

「……？」

SHRが終わり、彼との会話を試みようとしたところ、突然に後ろの席から声が出た。クルルー？ もしかして私の事だろうか？

振り返ってみると、明らかに腕の丈の長い制服を着た、なんだかのほほんとした雰囲気的女生徒が机から乗り出しているのが感じられた。

えっと、とりあえず挨拶しなくっちゃ。

おはようございます！

「……ッ！」

「おはようございます」

つ、次は何か御用ですか、かな？

でも手話が伝わるかどうか解らないし……。

「あ、大丈夫だよ。私ちよつとだけなら手話解るんだ」ババーンッ！

「……ッ!?」ガガーンッ！

な、なんと……こんなところに女神は居たのか！

「あ、私の名前は布仏本音つて言うんだ〜よろしくね〜?」

「……ッ！」

布仏さんがちゃんと手話を使って挨拶してくるのが解る。

そのことが堪らなく嬉しくて、胸の前で力一杯こぶしを握って頷いた。

「それでね〜よかつたらクルル〜とお友達になり」

「ッ!!」

お友達、その単語を聞いた瞬間布仏さんの手を強く握っていた。

ぜひっ！ ぜひお願いします！

布仏さんは突然の行動に若干驚いた様子だったが、すぐに笑って手を握り返してくれ

る。

「じゃあ私がクルルーのお友達第一号だ〜」

「ツ!!」

「私のことは本音って呼んでね〜?」

「ツ!!」

その時ちょうど、授業の合図の鐘が鳴った。同時に山田先生が入って来た。名残惜しいが、今しばらくお話はお預けのようだ。

「それじゃあまた後でね?」

「……ツ!」

学園生活一時間目、お友達ができた。

あ、そういえば彼に話しかけるつもりなのだった……。

……まあ、お友達もできたし、次の休み時間に話しかければいいかな?

★

授業終了の鐘が鳴り、礼。さて、彼に話しかけてみよう。

席を立て、そろそろと彼に近づく。

あれ？ でもどうやって話しかければいいんだろう？

肩を叩いたりすると不快に思われちゃうかもしれないし、そもそも彼は手話ができるかどうか解んないし……。

「…………ツ…………ツ」

結局彼の数歩手前で立ち止り、どうやって話しかければいいのか解らず右往左往してしまう。

「クルルーどうしたの〜？」

「ツ!？」

突然背後から現れた本音さんに耳元から話しかけられ身体が硬直してしまう。

「あはは〜ごめんね〜？ 驚かせちゃったかな〜？」

「…………ツ!」

「そっか〜。ところで、おりむーにお話でもあるの〜？」

「ツ!」

今度は別の意味で固まってしまった。

な、何故それを…………!？

「あんなにおりむーを見つめてオロオロしてたら誰だって解るよ〜」

「…………ツ」

うっ……、そんなに目立っていたのだろうか？

「それで、おりむーに話しかけたいの？」

「……ッ」

「それじゃあ、一緒にいこっか」

そう言つて私の手を握る本音さんはそのまま私を引き摺つて彼に向つて行く。

ええええええっ!? 待つて、まだ心の準備が!?

「大丈夫だゝ問題なゝい」グイグイッ

「——ッ! ——ッ!」フルフルッ

け、結構力強い!?

あ、ちよつと待つてほんとにまだ心の準備が……!・

「おりむーおりむー、ちよつといいかなゝ？」

「ん? えつと、誰だ？」

「あくひどいなくおりむー、自己紹介してたでしよゝ布仏本音だよゝ」

「ああ、すまん。視線に緊張してあんまし聞いてなかつたんだ……」

「そんなことよりも、君とお話したいつて娘がいるんだゝ」

「俺と話? 誰が？」

「えつとねゝ……ほおら生おりむーだよゝ、隠れてないででてこゝい」

「——ッ!? ——ッ!?」ブンブンッ!

必死に抵抗しようとするが、以外な程力強い腕力からは逃れられず彼の目の前に押し出されてしまう。

彼の驚いた顔が目の前に広がり、私はこれ以上ない程うろたえた。

わ、わ、わ、わあ……!!

「えつと……クルヴィだっけ? 朝にも会ったよな?」

「あれ〜? おりむーはクルルーとお知り合いだったの〜?」

「ああ、今朝通学路でな……。それで、俺になんか用なのか?」

「ッ! ツ! ツ! ツ!」

やっぱり朝見た時と同じ、空に似ているけどどこか違う色の視線が私をジッと見ている。

見つめられているという事実に加え、私のことを覚えてくれていたことに嬉しさが沸き上がり、どんどん顔が熱くなっていくのが解る。

自分の醜態に限界以上の恥ずかしさを感じ、思わず腕で顔を覆って隠した。

「——ッ!!」へこ〜

「ど、どうしたんだいきなり? 具合でも悪いのか?」

「ありやりや〜」

どうしよう……。彼から僅かに柑橘類こんわくの臭いがした。

困らせちゃった……。羞恥心や焦りで頭が混乱し、さらに顔が熱くなっていく。どうしよう……。どうしよう……。

いつそこから逃げ出してしまいたい、そう思った時だった。

「大丈夫だよクルル。クルルが頑張り屋さんだって、私達は知ってるから」
「ッ！」

本音さんが、背中を押ししてくれた。

ぐっと逃げ出したい気持ち堪え、腕を顔から離れた。

彼の目を見つめ返し、大きく息を吸って吐いた。

よし、大丈夫。まだ恥ずかしいけど、さつき皆に挨拶したみたいに、落ち着いてやれば大丈夫。

本音さんとだってお友達になれたんだから、ちゃんと伝えれば大丈夫……。のはず。

意を決して、おじぎしながら彼の目の前に握手を求めるように手を突き出した。

よ、よろしくおねがいます！

「え、えつと……？」

「クルルはねーおりむーとお友達になりたいんだってー」

「……ッ！」

断られたらどうしよう？ 迷惑じゃないかな？ もしかしたらお友達のなら方間違つてのかな？

様々な不安が頭を駆け巡り、彼が返事をくれるまでの時間がとてつもなく長く感じた。

「なんだ、そんなことか」

「ッ!!」

彼は何でもなさそうにそう言った。

やっぱり……だめ——

「これからよろしくな、クルヴィ」

——え？

「……ッ」

握られた。何を？ 手を。誰に？ 彼に。どうして？ 私が手を突き出したから。ということとは？

「……ッ!? ツ!?」

「おいおい、友達なんだからそんなにかしこまらなくていいだろ？」

「そうだよクルル、お友達二号ができたんだからもっと喜ぼうよ」

「お、ということはこのほほんさんはお友達一号か？」

「えへへ〜いいでしょ〜」

「うぬぬ、エンカウントは俺の方が先なのに……」

「友達になるのに時間は関係ないのだ〜」

握られた手と、彼と、本音さんをオロオロしながら見回すが、そんな私の様子に
関係無く2人の会話は続く。

「そうだおりむー、せっかくだから一緒にご飯食べようよ〜」

「ん？ いいぞ、ちょうど誘いたい奴がいるから一緒にいいか？」

「おっけ〜。クルル〜もいいよね〜？」

「ツ!？」

「だつて〜」

「はは、そうか」

「~~~~~ツ!!!」

結局この休み時間が終わるまで私はいじられ続けたのだった……。

でも、お友達が2人に増えた。彼とお友達になれた。本音さんに助けて貰った。

そして、「会話」というものを久しぶりに味わった。

やっぱりお友達って良いな、と思いました。

かくも炎がごとき輝きくアンスリウムく 2

I S 学園には、もちろん I S を専門的に学ぶための授業がある。

基礎的な知識、実習、さらに専門的な分野などなど、一応この学園も高校ではあるが普通の授業よりこちらの方が多し。

その膨大な量の内容を一年で詰め込むので授業はハイペースになり、そのため予習として前知識が必要になってくるのは当然だろう。

普通の授業でさえ予習がなければ内容を授業だけで覚えるのは難しい。

ましてや精密で高度な技術で造られた I S を理解するにはそれだけ大量の準備が必要になるわけだ。

まあ……つまり何が言いたいかというのだ。

(……さっぱりわからん)

この学園に通うことになっていた奴ならともかく、突然にここに放り込まれた俺が I S のことなんて予習しているはずもなく……。

教室を飛び交う様々な専門用語を一割も理解できないのだった。

「織斑くん？ 解らないところがあつたら遠慮なく聞いてくださいね？」

「……先生、正直に言っていていいですか？」

「はいっ！」

「……ほとんど解りません」

「へっ？」

山田先生の顔が呆けたまま固まった。

教室内の空気も硬直したように感じられる。

うう……仕方ないだろ、参考書なんて貰った覚えねえんだから。………ねえよな？

山田先生の顔をまともに見れず、助けを求めるように先程休み時間に再会を喜んだ幼馴染である篠ノ之箒へと視線を送る。

「ッ！」

あ、てめっ！ 逸らしやがったな!! この薄情者！

「……織斑、入学前の参考書は読んだか？」

え、参考書？

………そういえば、段ボールで送られてきた制服やら生徒手帳やらの中にそんなのがあつたような？

「ああ！ あれか！」

忘れていたことを思い出すと、どこかすつきりとした気分になるな。

そのすつきりとした気分のまま、千冬姉え正直にここの詳細を報告した。

「電話帳と間違えて資源ゴミの日に捨てました」

ズパァーンツ!!

出席簿を頂きました。

違うんだ……違うんだ、わざとではないんだ……。

「なおいわ」

ドパァーンツ!!

2発目頂きました。

うう、頭がへこむ……。

「必読と書いてあっただろう、馬鹿者が!」

「すみません……」

「あとで再発行してやるから、1週間以内で覚えろ。いいな?」

「い、いや、1週間であの分厚さはちよつと……」

「やれ、と言っているのだが?」

「……はい、やります」

全面的にこちらの過失なため何も言えない。

しばらくは徹夜かなあ……。

「ISはその機動力、攻撃力、制圧力と過去の兵器を遥かに凌ぐ。そういった『兵器』を深く知らずに動かせば必ず事故が起きる。そうならないための基礎知識と訓練だ。理解はできなくても覚えろ、そして守れ。規則とはそういうものだ」

……そうか、ISって結構危ないものなんだな。

元モンド・グロツツ優勝者だけあつて言葉の重みが違った。

……真面目に勉強しよう。

「え、えつと、織斑くん。わからないところは授業が終わってから放課後に教えてあげますから、頑張ってくださいね？ ねっ？」

「すいません。それじゃあ、色々とよろしくお願いします」

「い、色々っ!?」そ、そんな……私と織斑くんは教師と生徒の関係であつてそういう不健全なお付き合いは……で、でも放課後の教室で教師と生徒の2人きり……だ、ダメです。先生強引にされると弱いんですから……それに男の人は初めてで……」

「せ、先生?」

唐突に顔を赤くしながらいやいやんと頭を振り乱し始めた山田先生。

いったいどうしたんだこの人?

「で、でも織斑先生の弟さんなら……」

「んんっ! 山田先生、授業の続きを」

「あ、は、はいっ！」

怪しい雰囲気の漂い始めた山田先生を、千冬姉えが咳払いで正気に戻した。慌てていた為だろうか、山田先生は教壇に戻る最中、段差に足を引っかけ盛んに転んだ。

あえて表現するなら『うわあ……すげえ痛そう……』って感じだった。

「あうう……いたたたたた」

本当にこの人大丈夫なんだろうか？ そう思ったのは俺だけはないはずだ。

★

「あはは〜おりむー織斑先生にいっぱい怒られてたね〜」

「……ッ」

「ん〜？ 心配なの〜？」

「ッ！」

「それじゃあ、クルルーがおりむーに基礎知識とか教えてあげなよ〜」

「ッ!!」

「いってらっしや〜い」

先程の授業で織斑先生の教育的指導をその身に受けた彼の後ろ姿は、若干落ち込みの色が見て取れた。

どうすれば元気づける事ができるだろうか？ そんな悩みに本音さん。

確かに勉強を教えれば彼も今後の授業で苦勞することも少なくともできるだろう。それに休憩時間などを利用すればお話したり、あの色を傍で観察できるかもしれない。

正にかゆいところに手が届く、天啓がごときアイデアだった。

さすがは本音さんだ、お友達第1号だ。

早速実行に移すべく、彼の元へ駆け寄るが、他の生徒が彼の席の前に立っていることに気付いた。

「ちよつとよろしくて？」

「へ？」

どうやら先を越されたらしい。しばらく待つてから話を切り出そう、割り込みは良くないし。

……それにしてもあの生徒の色、どこかで視たような？

「訊いてます？ お返事は？」

「あ、ああ、聞いてるけど……どういう用件だ？」

「まあ！ なんですの、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光榮なので

すから、それ相応の態度というものがあるのではなくて？」

黄色……自尊心や固定観念が表面を覆っている。だけどその奥、僅かに見え隠れする優しさや安心の青が漂っている。

もう少し良く視れば思い出せるだろうか？

「えっと、悪いな。俺、君のこと誰だか知らないし」

「わたくしを知らない？ このセシリア・オルコットを？ イギリスの代表候補生にして、入学主席のこのわたくしを!？」

「あ、質問していいかな。セシリアさん？」

「ふふん、下々の者の要求に応えるのも貴族の役目ですわ。よろしくてよ？ 質問を受けましょう」

「代表候補生って、何？」

ガタガタツ、と周りの誰かがずっこけたような音がするが、集中しているため気にならなかった。

……むむむ、もう少しで思い出せそうだけど取っ掛かりが足りない。

「あ、ああ、あつ……!」

「アンパン？」

「あなた本気でおっしゃってますの!？」

あ、怒りの赤で染められちゃった。

これでは色が解らない。

「おう、知らん」

「信じられない……信じられせんわ。極東の島国というのはこうも未開なのでしょ
うか？ 常識ですわ、常識。テレビがないのかしら……」

うーん、感情的になっちゃったからか呆れの茶色とかが混ざってしまつて余計解らな
くなつてしまった。

私の共感覚は五感で感じたものしか理解できないため、その奥に潜む相手の心理まで
は読み取れないのだ。

落ち着いている時や、直接触れたりすればまた違つてくるのだが……。

「で、代表候補生って？」

「はあ、まあいいでしょう。よろしくて？ 代表候補生というのは、国家代表IS操縦
者の候補生として選ばれたエリートのことですわ！ 単語から想像すれば解るでしょ
う？」

「そういえばそうだ」

覚えていないということとはそこまで印象に残る人物ではないのだろうか。いや、ここ
まで来たら思い出さないと気持ち悪い。思い出すまで頑張ってみよう。

そういうえば、彼と彼女はさっきから何の話をしてるんだらう？

色を視るのに集中してて全然聞いてなかった。

「そう、エリートなのですわ！」

……？ エリート？ ISの事かな？

「本来なら、わたくしのように選ばれた人間とクラスを同じくするだけで奇跡、幸運なのよ!! その現実をもう少し理解いただけるかしら？」

「そうか、それはラッキーだ」

「……馬鹿にしていますの？」

会話の途中からではよく解らないが、彼女はまだ一年生にしてそれなりの実力と地位を得ているらしい。

そのことから推測するに、国家代表候補生だったりするのだろうか？

それならば納得がいく、確かに代表候補生などの枠は少ないし、モンド・グロツソに出場する国家代表となるともはや人類最強レベルだ。

さらにIS操縦者は世界の半分から熱望されると呼べる職種だ。年々増えている希望者が凌ぎを削って代表の座を争い、前年までの代表が鞍替えなんてこともある。

厳しい枠の中で代表候補生の座を勝ち取った彼女には、稀有な才能と並々ならぬ努力があったはずだ。

あの少々自尊心が先行する態度も、その自信の現れということなのだろう。

(すごいなあ……かつこいいなあ……)

多少傲慢に映つても、彼女から溢れる強い自信は強烈な色彩を放っている。

自らの人生を縛られて生きる私にはとても眩しく映った。

「お前が幸運だつて言つたんじゃないか」

「……大体、何も知らないくせによくこの学園に入れましたわね。唯一男でISを操縦できると聞いていましたけど、期待外れですわね！」

「俺に何かを期待されても困るんだが」

はっ、そういえば私は彼に用事があつたんだつた！

この興味が沸くとすぐ目移りしてしまうクセを直さないと、いつまで経つても彼に話しかけるタイミングを逃し続けることになるかもしれない。

うん、お話が終わったらちやんと話しかけよう。

彼女の色は気になるけど我慢我慢。

「まあでも？ わたくしは優秀ですから、あなたのような人間にも優しくして差し上げますわよ？ 解らない事があれば……そうですねえ、泣いて頼まれたら教えて差し上げてもよくなってよ？」

「ッー」

教える？ 彼に？ ISの事を？

……だめ。

彼女が？

…………だめ。

とられちゃうの？

だめっ！

「何せわたくし、入試で唯一……」

「ッ！」

「あ、あら？ エレフセリアさん？ ……何故私の背中に抱きついてますの？」

「……ッ」

「え、えつと、わたくしまだお話の途中なので、できれば離していただきたいのですけど……？」

「……ッ！」

これ以上話を続けられないように思いつきり会話の流れを断ち切ったが、自らの行動に本人ですら非常に困惑していた。

何をしたのか解らなかつた。ただ、彼と共に勉強するという時間を、彼をとられてしまふんじゃないかと不安になったのだ。

でもまだ勉強をしようとすら言っていないし、そもそも彼がそれを了承してくれるかも解らないのに、どうして私はこんなに焦ってるんだらう？

理性と欲求が噛みあわず、頭の中でグルグルと回り混乱していく。

「……ッ」

「おいおい、どうしたんだよクルヴィ？ もしかしてセシリアさんと友達になりたいのか？」

「ッ!!」

本来彼の放った言葉は明後日の方向に向いていたが、今の混乱した状態の私にはど真ん中だった。これ幸いと頷いて同意を示し、この事態の收拾を計ることにした。

「え？ わ、わたくしとお友達にですか？」

「ッ！ ツ！」

「ま、まあそんなに頼むんでしたら、このセシリア・オルコットがお友達になって差し上げてよろしいですわ！」

やった！ うまくいった！

彼と話しかけようとするとなぜか友達が増えていつてる様な気がするけど、別にいいですよ？

なんとか混乱から脱した私は、彼女の背中から離れ面と向かって友達の握手を求め

る。

するとオルコットさんは胸を張って尊大な態度でそれに応えるものの、握手をしてみると明らかに顔が緩んでいるのが感じられた。

「……ッ！」

「そ、そんなに強く握らなくても、別に逃げたりいたしませんわよ？」

「友達ができたのが嬉しいんだろ。それじゃあセシリアさん、俺とも握手してくれよ」「なっ……!! 何をおっしゃいますの!?!」

「クルヴィの友達なら、俺とも友達ってことだろ? だから握手するんだよ」

「な、な、なっ……!!」

オルコットさんは彼から求められた握手にどう応えたらいいのか戸惑っているらしい。

代表候補生としてのプライドや、IS操縦者としてどこか男を下にみていたことから、素直に応じることに抵抗を覚えているものの、決して嫌という訳ではないようだ。

その証拠に、奥に隠れていた青がドンドン溢れだしている。

これはもう一押し必要かもしれない。

「……」

「え、エレフセリアさん? なんですか、その眼差しは? というか目を閉じた状態で

何故視線を感じますの？」

「……………」

「くう！」

「……………」

「あ、あ、あうう……………」

「……………」

「わ、解りましたわ！ 解りましたからそんなに見つめないでくださいまし！」

オルコットさんが遂に根を上げた。

やっぱり、ちゃんと念じれば想いは届くようだ。

オルコットさんはしぶしぶと言った表情で、彼の差し出された手を握る。

「……………まあ、お友達の頼みですから？ あなたとも友好を結んであげますわ、この幸運

に感謝することですわね！」

「ああ、よろしくな。セシリア」

「ツ！」

その時、ちょうど授業の鐘が鳴った。

「あつ……………そ、それではお二人とも、わたくしは席に戻らせていただきますわ！」

鐘を聞いたオルコットさんは、握られていた手を慌てて離して足早に自分の席へ戻つ

て行く。

ちらりと視えた彼女の青は、再び薄まっていったものの、完全に消え去ることなく黄色と混ざり合っていた。

どうやら照れているらしい。

「なんかI Sが登場してからの女性の典型みたいな奴だと思ってたけど、案外いい奴かもな」

「ツ！」

「ま、クルヴィが言うんだから間違いないか！」

わ、わあ……！ これって褒められてるんだらうか？

そうだとしたら、少し……いやかなり嬉しい。

「……ツ」

なんだか幸せな気分。

まるで姉妹達と過ごしていた時に戻ったみたいだ。

「あ、クルヴィあぶねえ！」

「ツ？」

え、いきなりなに——

ゴンツ！

「~~~~~ッ?!?!?」

「何をぼうつと突っ立っている、早く席に戻れ」

いつのまにやら教室に入ってきていた織斑先生が、出席簿を脳天が割れるんじゃないかと思う威力で振り下ろしたようだ。

かなり痛くて涙が出てくるが、我慢してよろししながら席に戻った。

結局今回の休み時間は、目的未達成をお友達3号ができたことで差し引いても、最後の織斑先生の教育的指導によってマイナスだった。

かくも炎がごとき輝きくアンスリウムく 3

「……」

「まあまあ、次があるよクルル」

「ありがとう、本音さん！ あなたがお友達で良かったです……！」

「やだなあく、大げさだよ。それにしても、今日だけでお友達がいっぱいできたね」

「……ッ」

「何故かおりむーに話しかけようとする人とお友達になっちゃって、そのまま本来の目的を忘れちゃうんだよね」

「……ッ」

「そうなのだ。」

結局放課後までに彼と勉強するという誘いを告げる事ができず、部屋に運び込まれているはずの荷物などの整理の為彼と別れのあいさつを交わして寮に来てしまった。

世界で唯一の男性IS操縦者ということが彼の注目を引いていたのだろう、休み時間に話しかけようとすると、オルコットさんと同じように誰かしらが先に彼と話している

後だった。

しかも皆似たように彼にISの勉強の誘いをかけるので、その度に会話の流れに割って入ってお友達の握手を求めて行ったのだ。

その数はクラスの半分以上に昇り、皆こちらに好意的な印象を抱いてくれたのか、それとも慌てる私に嗜虐心を擲られたのか、今日だけで私の立ち位置はすっかりイジられキヤラとして定着してしまった。

クラスに早く馴染めたことや、多くの友人を得られたことは嬉しいのだが、意図したことと違うお友達の増え方にどうも釈然としない気持ちになる。

それに本来の目的は未達成なのだ。

喜んでいいのか落ち込めばいいのか、複雑な心境というものを久しぶりに感じていた。

姉妹達から『お母さん』と呼ばれた時の心境と似てた気がする。

「……………」

「明日があるさ、悩んでもしょうがないよ」

今日の出来事を思い出して再びブルーになっていると、本音さんがニコニコと笑いかけながら慰めてくれた。

……そうですね、いつまでも落ち込んでても時間が勿体ないですもんね。

うん！ そうと決まれば頑張るぞー！
ふんすっ！

「おお〜！ 元気になったクルル〜って可愛いね〜」

「ッ!?!」

ど、何処が可愛いかったんですか？

自分ではよくわかんないんですが……。

「も〜その反応も反則だよ〜！」 ムギューー！

「ッ!?! ツ!?!」 オタオタッ

本音さんがからかつては私が恥ずかしがり、私が逃げたしては本音さんが抱きついて捕まえる。

そんなお友達とのじゃれあいを楽しんでいる内に、察に着くまでにはすっかり日が暮れたのだった。

★

「……」

「クルル〜、謝るから機嫌直してよ〜……」

「ッー！」

「ああ………」

始め私は、正直クルヴィ・エレフセリアという少女を怪しんでいた。

今年簪お嬢様のメイドとして一緒に入學する時に、盾無お嬢様やお姉ちゃんから渡された重要人物に関する情報。

その中の一つ、“要注意”と書かれた項目に記された人物が、クルヴィ・エレフセリアだった。

ツアラストウラ・プランク進化人類学研究所、ISの登場から様々な新機軸の発見を世に送り出してきた学会や世間にも有名な研究機関である。

特定の機器を使って遠くの物や固定の難しい物などを念じるだけで制御できるという“キネシス”や、記憶野の情報がある程度転写することの可能な“メトリア”など、今までオカルト分野とされてきた超能力を理論的に科学応用するという偉業を可能にした初の研究所であり、その技術は現在のISにも応用され、イギリスの軍事会社と合同開発も行ったというのも業界では有名だ。

社会的貢献や世間からの支持は測り知れず、その規模は個人研究所でありながら強大なシエアを誇っている。

一表の話では《……》。

「クルルルー……」

「ッ！」ピクッ

情報によれば、かの研究所はIS登場前のロシアから支援を受けていた頃から、まったく情報を洗えない子供達が收容されていたらしい。

人種はバラバラ、経歴を追えるような共通の特徴もなく、そして集める目的も不明。

これだけでも十分怪しいが、情報にはまだ先があつた。

クルヴィ・エレフセリア、この人物の個人情報が偽装されていると一断定《・・》されたことだ。

怪しい、これはもはや真つ黒だ。

あの時のお嬢様やお姉ちゃんは眉を顰めて辛そうな表情だった。普段は真意を曝さないお嬢様ですらそうだったのだ、私に伝えていない情報があるのだろう。

もしかしたら、わざと伝えていないのかも。2人とも優しいから、私には荷が重いと氣遣われたのかもしれない。

とにかく、それだけでも私が彼女に対して警戒心を抱くには十分な情報だった。

「クルルーに嫌われちゃったよ〜せつかくお友達になれたのに〜」

「ッ！　ッ！」ピクッピクッ

しかし、教室に入ってきた少女は、あまりにも純粹だった。

「悲しいよ〜もう生きていけないよ〜」

「ッ!？」 オロオロ

生まれ付き声を出せないというハンデを抱えていながら、怪しい研究所で恐らくまともな扱いを受けたとは思えない境遇にありながら、彼女が伝えてくる胸の内に、静かに心を打たれたのだ。

みんなと仲良くなりたい、みんなと対等でありたい。

普通ならば特に意識することは無いが、心のどこかでは皆が密かに願っている想い。

だけど、彼女は一般的な意味以外での願いがあるように感じられた。

多分彼女は、友達というものについてある程度のイメージがあるのだと思う。

そうでなければ、恥ずかしがったり時折大げさだったりする所はあるが、ここまで自然に溶け込むことはできないだろう。

彼女は友達ができたことを喜びはするが、友達に対して依存はしていないのだ。

まるで互いの距離の取り方を知っているかのような対応。

始めはぎこちなかったものの、初日にしてクラスの中でイジられキャラとして君臨する程周りに受け入れられていたことから、私よりも適応力があるかもしれない。

警戒心を持っていて私も、今や彼女がお友達であるということに違和感を感じなかった。

それだけ彼女の周りは居心地が良く、そして彼女は普通よりも純粋に感情を現わしていた。その裏表ない態度での恐らく無意識での行動が、これまた純粋で穢してみたいようなイジめてみたいような小動物の赤子のような可愛らしさを感じる。

今みたいに、どこかからかわれていると感じながらも、必死に手話で謝罪をしてくる
ところとか。

「ッ!!」ワタワタッ

「あはは〜大丈夫だよクルルー、クルルーの可愛いところを堪能したから元気いっばいだよ〜」

「ッ!?!」ガーン!

ようするに、私の中のクルヴィ・エレフセリアは、これが相手を欺く演技でない限り、とてもじゃないが悪い事ができそうな娘には観えなかった。

お友達としてそう言い切れるものも、彼女の魅力の一つだった。
今度簪お嬢様に紹介してみようかな?



「……………」

一夜明けて、今日も元気にみんなと勉強を頑張ろう！……とは行かなかつた。

昨日は彼との勉強の為に色々準備をしていたのだ……徹夜で。

いそいそと、その内は今日のことを振り返ったり彼との勉強を想像しながらワクワクと、準備を進めていたらいつのまにか朝になっていたのだ。

「おはよう、クルヴ、イ……う？」

「……………」

そういえば、彼は名前でもいいぞって言つてたけど、まだ恥ずかしいなあ。本音さんとは同じ部屋だったから嬉しいなあ……でも彼が女の子と同棲だったなんて驚いたなあ……彼は年相応な感性をしてるら吃驚しただろうなあ……彼が女の子だったら大丈夫なんだけど、女の子の彼は可愛いのかなあ……織斑先生が綺麗だからきつと可愛いんだろなあ……それでも彼の色は変わらないんだろなあ……えへへ、準備も納得いくできだったしよしよに勉強できるかなあ……女の子だから話題が弾むだろうなあ……あれ？ 彼は女の子だっけ？ 男の子だったけ？ ……まあ、いっしょに勉強できるならどつちでもいいやあ。

「…………ツ〜♪」

「お、おい、クルヴィ？ どうした？ 大丈夫か？」

「…………ツ。…………ツ〜♪」

「明らかに緩みまくってるぞ!」

「……ッ。………ッ!」

眠気で若干思考が変なところに向かった気がする。危ない危ない。

あれ? いつのまにか彼が目の前につ!?

ええつと……! おはようございます!

「ッ!」

「あ、ああ、おはよう」

えつと、ここまで近くに居るってことは、もしかして今までの状態を覗られていたの
だろうか……?」

………わ、わぁ!

「くくくくくくくくくくくくッ!」

「おおつ!」 ものすごい赤くなってどうした!?! 熱でもあるのか!?!」

彼が心配してのか顔を覗きこんできた! さらに羞恥心を加速させた私は、顔を見られ
ないように必死に腕で顔を覆い隠す。

「ッ! ツ!! ツ!!」

「お、おい? 本当に大丈夫か?」

「ありやいや〜これは厄介だね〜」

「あ、のほほんさん、おはよう」

「おはよう、それはさておき、おりむーここは私に任せてくもうすぐ授業だし」

「えっ？ 恥ずかしがり屋ってことは昨日で解ったけど、ボーっとしてたし風邪でも引いてるんじゃないのか？」

「いや、むしろおりむーがここに居る方が原因かな？」

「……俺、なんか悪いことしたか？」

「ん、まあ大体おりむーのせいかな？」

「マジか」

「あ、でもクルルーの自業自得でもあるから。そんなに気にしないでも大丈夫だよ」

「そうなのか？ まあ、よくわかんないけど、のほほんさんに任せるよ」

「はいはい」

「ッ!? ツ!?」

わ、わあ！ わあ！ うううううう、どうしてこんな役回りばかり……。これから

も私はこの立ち位置なのだろうか？

……姉妹達が感情豊かになつてからは一番下の私がイジられ役だったなあ。もはやこういう星の下に産まれたと諦めるしかないのだろうか？

「クルルークルルー」

「ッ！」

本音さんの声が聞こえるが、今は恥ずかしくて堪らないので放っておいてほしいです……。

「クルルー、昨日はずっとおりむーとの勉強会のために頑張ってたよね？」

「…………ツ」

「それでちよつと疲れちゃって、おりむーに恥ずかしいところ見られて、どうしようもなくなっちゃった？」

「…………ツ」

「クルルーのそういうところが可愛いんだけど、ちよつと気にし過ぎかな。私だつて今日起きた時に寝ぼけて壁にぶつかっちゃったしね」

「……………」

「もちろんその時私も恥ずかしかつたよ？ でもね、失敗しない人なんていないよ？ おりむーだって昨日大失敗してる訳だし。だけど、私もおりむーもあんまり気にしてる様に見えないでしょ？」

「…………ツ」コクツ

「それはね、『次は気を付けよう』って思ってるからだよ」

「ッ！」

「失敗しても、次に活かすために、むしろその場で失敗を利用するくらいの気持ちで頑張ればいいんだよ」

「ッ!!」

衝撃だった。本音さんの言葉の一つ一つが確実に心に沁み渡る。

私は少し肩意地を張っていたのかもしれない、そう反省することができた。

人は完璧にはなれない。一つの研ぎ澄まされた完璧な力を持った者は、もはや人間としての摂理や倫理観から外れてしまっている。

私は久しぶりに味わう友達という関係性に、どこか神聖なものを感じていたのかもしれない。

前世の記憶が喚起されて、親友と呼ばれる人物と自分の付き合いを思い出した。

友達とは心を許し合う物、言いたいことは踏み込んで、言いたくないことは気遣って、ここままでと思える姿を曝しあう。

気安い、とはちよつと違う。そこにある種の信頼を抱きながら、あくまで素っ気なく、近しい関係。

そっか、そうだったね……。

また一つ、学んだ気がする。ああ、姉妹達が居たら教えてあげたいなあ。彼女達とは

家族だったから、お友達のこととはあんまり教えてなかった。

そのことを少し後悔した。

だけど、もしまた会えることがあるなら、彼女達に聞いてみることにしよう。

ありがとう、本音さん。

そう手話を返す。

「ッ！」

「どういたしました〜」

うん、今考えたら、彼の為に頑張ったんだからあんまり恥ずかしがるような事じゃない気がする。

うんうん、そうだよ。彼との勉強の為の準備を

「……………ッ!!」

あ、また誘うの忘れてた。せっかく朝から彼と話せたのに。

「……………」

……………頑張るもん、次は頑張つて誘うもん……………多分。

「その意気だ〜勝機はあるぞクルル〜」

「ッ!!」

本音さんの言葉に拳を握り、次のチャンスへの意志を固めるのだった。



「それではこの時間は実戦で使用する各種装備の特性について説明する」

織斑先生の授業は真面目に聞かないと、容赦なく出席簿で教育的指導を施されるので皆緊張感を持って臨む。

私も眠気で少し頭がボーっとするけど、出席簿の教育的指導は勘弁してほしいので必死に目を擦り、聴覚を研ぎ澄まして織斑先生の言葉を待ち構えていた。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出す代表者を決めないといけないな」
 そう言うのと織斑先生は、クラス代表者の努める役割を簡単に説明する。

どうやらクラス代表者は、普通の学校で言うクラス委員長のようなものらしい。

クラス代表戦以外にも、生徒会への会議や委員会への出席など細々とした仕事があるようだ。私は喋れないから、会議とかそういうのは無理だろうなあ。

イジられ役だからみんなをまとめられるかも解らないし。

セシリアさんなら、まじめだし代表候補生だからリーダーシップを発揮できるんじゃないかな。

「はい、織斑くんを推薦します！」

「私も彼がいいと思いまーす！」

「では候補者は織斑一夏。他にはいないか？ 自薦他薦は問わないぞ」

「ッ!?!」

え？ 彼がクラス代表者？

……うーん、まだ実力や意識としては不十分かなあ？ だけど成長の幅や彼自身の性

格的にもそんなに悪くないかもしれない……？

「お、俺!?!」

「織斑、席に着け、邪魔だ。さて、他にはいないのか？ いないなら無投票当選だぞ」

「ちよ、ちよつと待った！ 俺はそんなのやらな——」

「自薦他薦は問わないと言った。他薦された者に拒否権など無い。選ばれた以上覚悟

しろ」

「い、いやでも——」

あ、でもそうになると彼の負担が増えちゃって一緒に勉強できる時間が減っちゃうかも

……。

だ、だめっ！ だめ、だけど……。

……彼の立場を考えると、早急に実力を付ける必要があるというのも解る。

世界で唯一の男性のIS操縦者、その肩書きは世界を揺るがしたと言っている。

少なくとも、各国はどのように起動させることができるのか徹底的に調べ尽くそうとするだろう。

……私のように常識非常識問わずに、だ。

だけど、彼はブリュンヒルデ、織斑千冬の弟だ。彼女がそんなことを許せるはずがない。

たぶん、彼がIS学園を入学させたのも、国際IS委員会の出頭要請から自分の手元で護るためつもりなのかもしれない。

そう考えると、彼に実戦経験を積ませ、自衛できるようになつてもらおう機会を多く得られるだろうクラス代表者の立場は非常に魅力的に思えた。

でも、それではセシリアさんは納得しない。

「待つてください！ 納得できませんわ！」

ダンツ！ と机を叩きながら立ち上がり、大きな声を出して異議を出した。やっぱいい……。

「そのような選出は認められません！ クラス代表者とはクラスの顔ですわ！ まだISに乗つて幾ばくも無い素人に任せるなど言語道断です！」

わあ、セシリアさん、結構日本語が達者ですねぇ……。

……現実逃避するな、私。愚痴は墓場で言えばいい。

だから今は、どうすればいいか考えなくちゃ。

「負けでもすればそれこそ、代表候補生としての私のプライドが許しません！　そ、それに……」

セシリアさんの色は黄色以外に青とコンプレックスの濁色などが混ざり合って非常に見えにくくなっていた。

代表候補生としてのプライド、男に対するコンプレックス、だけど友人として受け入れた人物への侮辱ともとれる発言に対する苦悩。

それらがせめぎ合っていて、素直になれなくて、彼に対するきつい態度に変わっているのだと思う。

どちらとも大切なお友達だ。それにセシリアさんは、予想外だったが初めて私が自主的に作ったお友達なのだ。

だから彼の事情と彼女の心境、両方を満たせる解決策を出さなければならない。なぜなら私は2人のお友達なんだから。

「い、いち……ッ！　極東の無知な男なんぞでは恥さらしです！　物珍しいからと曲芸を仕込むためにクラス代表者の枠に推薦するのは私にとつてあまりに屈辱ですわ！」
言えは言う程漂ってくる一香辛料《こうかい》の匂い。

ダメだ、このままどっちも傷ついて、擦れ違ってしまう。

何か、何か解決策を……!

「大体、こんな男が転がってる様な文化としても後進的な国で暮らすこと自体、耐えがたい恥辱で——」

「イギリスだって、大したお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

「あつ……。お、おいしい料理は沢山ありますわ! あ、あなた、私の故国を侮辱しますの!」

「先に侮辱したのはそつちだろ」

売り言葉に買い言葉。引つ込みの着かなくなつた2人の良い争いはますます激しくなっていく。

そして遂に、セシリアさんが決定的な行動に出た。

「決闘ですわ!」

「おおいいぜ、四の五の言うより解りやすい」

わ、わあ! どうしよう、このままじゃダメなのに、ええつとええつと、ああもうなんだか解らなくなつてきた!

あああああああああああああああああああもう! もうもうもうもうもう! いちやええええええええええええええええええええええ!!

「わざと負けたら私の小間使い、いえ、奴隷しますわよ!」

「ッ!!」

私は2人が言い争う中、なるべく注目を引くように音をたてながら立ち上がった。

「どうした、エレフセリア。貴様もクラス代表者に立候補するつもりか?」

「……ッ」

織斑先生は静かに笑っていた。

やはり、彼に経験を積ませる意味でクラス代表者に選ばせるつもりだったのだろう。

セシリアさんの行動も、ある程度予測していたのかもしれない。

納得のいく計略だったし、そこにさらに私が加わればまさに柵から牡丹餅だったはずだ。

これが織斑先生の思い通りだとしても、私は賛成する。

だけど、2人は私のお友達だから、こんな風に傷つけあうのは見たくない。

彼には経験を、彼女には謙虚を、なら私は2人に踏み込む覚悟を。

「よろしい、ならば織斑、オルコット、エレフセリア。この三人で模擬戦をやってもらう。次の月曜に第3アリーナにて決着をつける。3人は各自準備しておくように」

「……解りましたわ」

「解りました」

「ッ!」

これからのために、これまでの関係を壊そう。

先へ進むために、今までの彼等を変えよう。

ここにいるために、それまでの自分に別れを告げよう。

「……ッ！」

恐いけど、無くしてしまうのが怖いけど、それでも眺めるだけじゃダメだから。

余計なおせっつかいかもしれない、ただの自己満足かもしれない、もしかしたら私が何もせずとも納まるかもしれない。

だけど決めた。私は2人と戦う。お友達として、これからもお友達でいるために。

私は、自分を曝け出すことで、自分を変えよう。

『……………』

3人の視線が静かに交わる。

しかし私を見る2人の色には、動揺と困惑が刻まれていた。

それに対して私はペコリと頭を下げる。

そしてしっかりと決意を伝えるために、言い争いでお互いの近くに居た2人の手を強く握った。

「ッ!!」

「ッ！ ……解りましたわ、クルヴィさん。このセシリア・オルコットの誇り掛けて、

全力でお相手いたしますわ！」

「……よくわかんねえけど、クルヴィがやるってんなら俺も手加減はしないぜ」
「ッ！」

2人から闘志を示す輝く炎のような紅が燈される。

私もそれを見て、決意と覚悟を固めたのだった。

さあ、互いを認め合うためのOHANASHIを始めよう。

心を澄ませて～ウメノハナ～

昼休み、自炊していない生徒は大体学食で食事を摂っている。

現代の若者がどの程度自炊できるかは知らないが、学食の賑わいをみるに自信を持って作れると言える者はあんまり居ないのかもしれない。

料理のプロと高校生の腕を比べるのは間違っているかもしれないが。

私はモクモクとペペロンチーノと生ハムサラダを食しながら、来週の模擬戦に向けて着々と情報を整理していた。

公開されている限りでのセシリアさんの専用機のスペックや訓練やその他の機動データ。

その他にも戦術の傾向や読み取れるクセ、必要と思える情報はすべて目を通して（……）熟考する。

洗脳（プログラム）が外れるように設定された項目の内の一つ、『代表候補生や専用機に関する情報収集』によって私が視覚を使用できる数少ない機会である。

展開されたディスプレイに映る文章から重要度が高く、かつ相手のクセなどに繋がりそうな情報（いろ）を選び分ける。

視覚が開放されたことで可能になった共感覚の真髄とも呼べる反則的な情報知覚能力によって、さほど時間をかけずに目的の情報収集することができた。

色の付いた文章を簡潔にまとめ、大体の戦闘方針とそれまでの準備すべきことを手元のノートに書きだしていく。

「……ッ……ッ？」

何度か推敲して、1日かけてようやく納得のいくものを練る事ができた頃には、さつきまで皿の上にあつたはずの食材は綺麗に無くなつていて、フオークが何も無い皿をつく音が小さく響いた。

なんとなく損した気がしたが、何とか資料は完成したので良しとする。

後は………、

「………」 チラッ

視線の先にいる彼にどうやってこれを渡すか、という問題をクリアするだけだ。

「それで？あれだけの啖呵をきつたんだ、何か勝算でもあるのか？」

「いや、それは今から考える」

「はあ……そんなに簡単に思いつけば苦労しない。大体ISのことも碌に知らないのに戦える訳なからう」

「うぐっ……て、徹夜すればなんとか」

「体力低下で集中力が落ちてただでさえ低い勝率が皆無に等しくなるな」

「………やっぱ早まったかなあ」

「……まったく、仕方ないな。わ、私が教えてやらんこともないぞ」

「本当か!？」

「あ、ああ、私に任せておけ!」

篠ノ之箒さん、あの篠ノ之東博士の実の妹で彼の幼馴染……。

そんな彼女が彼にI Sのことを教えるという。

敵の私が直接渡すより、彼女に渡した方がいいかもしれない。

それに彼にこういうものを作っていたとバレるのは少し恥ずかしいし……。

彼女が一人になったらお願いして渡して貰おう。

……頭、少し痛いな。ちよつと久しぶりだったから集中し過ぎたかも。

うん、篠ノ之さんの顔も覚えたし、必要な情報も記憶した、今回はこれでお終いかな。

それに、ようやく彼の顔も見れたことだし、ね？

自分を納得させるように心の中で呟きながら、私はゆっくりと瞳を閉じた。

★

午後の授業が始まる前、教室へ戻る途中で私の制服を引っ張る何者かに引きとめられた。

反射的にそれを払って振り返ると、そこには前日一夏と仲良く話していたクラスメイトが少し俯き加減で立っていた。

「お前は……」

「……」ペコッ

確か、クルヴィ・エレフセリアといったはずだ。朝礼の後で千冬さんから紹介された、声の出せない少女。一夏との再会以外に興味がなかった私も、彼女の自己紹介を聞いた後思わず拍手してしまったことを覚えている。

その後自己紹介通りに、クラスメイト達と着実に友好を深めている姿を見かけた。

そして、今度一夏と戦うことになる相手だった。

「……私に何か用か」

「……」コクッ

彼女は頷きながら、一枚のノートを差し出して来た。

「なんだそのノートは？」

「……」グイグイッ

「なっ、お、おい、何をするんだ……!」

突然彼女はノートを推し付けきた。

戸惑いながらもノートを手で受け止めると、彼女はほっとした表情で一步退いた。

「……………」ペコッ

そして一度頭を下げた後、教室へ向かって足早に去って行ってしまふ。

「……………」なんだというのだ、一体」

意図の読めないその行動にしばし呆然とするが、ふと手に持ったノートに目移る。声を出せないが会話はできると言つた彼女にしては、随分と性急で切羽詰まつたような態度だつた。

その理由がこのノートにあるとなると、気にしない訳にはいかなかつた。

ましてや、彼女は一夏の対戦相手なのだ。

この行動に一夏に対する何らかの意味があるのではないか？そう邪推しても仕方あるまい。

「……敵からの贈り物は調べてからではないと危険だからな、うん」

そう理論武装で自分を正当化しながら、ノートを慎重に開く。

「これは……………」

そこに書かれた内容に、思わず声を漏らすほど瞠目した。

一行一行図説などを入れて丁寧な、そして簡潔に書かれていたのは、私達が昨日から

習い始めたばかりのISに関する詳しい説明だった。

時間をかけて作られたであろうノートの内容は、正にお手本と言っているほど綺麗で見易かった。

これを作成するのにどれほどの労力と時間をかけたのか、にわかには想像できない。

しかし、仕上がりは素晴らしいと呼べる出来だが、内容自体は入学前の参考書と殆ど変わらないものだった。

何故こんなものを私に渡したのか？

答えはすぐに解った。

「一夏の、ために・・・」

それしか考えられない。一夏も言っていたではないか、女だらけで不安だったけど彼女と友達になれて意外と馴染めそうで安心したと。

一夏にとって彼女は友達だ、だが彼女は？

ただの友達にここまで作り込んだノートを渡すだろうか？

もしかしたら、彼女も自分と同じ気持ちを抱いているのではないか？

考えれば考えるほど、彼女に対して疑問が沸いてくる。

それが主に一夏と彼女との関係性についてであることを、気付いているかは本人にか解らないが。

そして途中で何かの用紙が挟まれていることに気が付いた。

用紙は折りたたまれていた為、自分でも気付かない内に焦りを感じながら急いで中身を確認する。

「なっ・・・!」

書かれていたのはただの一文。

だが、それが何よりも私の心を揺さぶった。

『役立ててください。P.S. 模擬戦が終わったら、お友達になつて貰えないでしょうか?』

そこには一夏に関することは何も書かれていない。

それどころか、喋ったこともない私への交友の申し出の方が遥かに長い。

だが、解ってしまった。

その文章に静かに秘められた、その胸の内を。

「くっ・・・!よくも、こんな、ふざけたものを・・・!」

彼女は一夏を慕っている。

それも、こんなに必死で作った筈のノートを、おそらく自分の心をそつとしまつてまで私に渡すくらいにいいじらしく。

それどころか、邪魔者である私に対して真摯に交友を求めていた。

そんな彼女の心遣いに、私は自分でも理不尽だと解っていないながら、強く強く、嫉妬してしまった。

「これでは、浮かれていた私がるで……！」

とても純粋な想いで作られた、一夏の為に彼女が自分で成し遂げた成果。

そんな彼女とは対照に、自らの境遇に不満を言うだけで行動せず、久しぶりに再会した一夏の状況をまるで考慮せずに、自らの欲求だけを推しつけている自分。

去年の剣道大会で自覚した、鬱憤を晴らすためだけに暴力を使ってしまった自分の浅ましさを。

その時からまるで成長していないのだということが、改めて私の心を掻き乱した。

「こんな……こんなもの……！」

本当は誰のせいでもない、ただ自分が弱いせいだと解っているのに、手に持ったノートを見る度に、どうしても悲しくて、悔しくて、惨めで、妬ましくて、苦しくなる。

暗い自分の本性を認めたくなくて、心を乱す目の前のノートのせいだと思いたくて、ただ彼女の必死な誠意を裏切ることができなくて、結局どうしようもなく心が痛い。

どうすればいいのか、まるで解らない。

「わ、たし、私、は……」

姉さんのせいで一夏と離ればなれになって、だけど本当に奇跡みたいな巡り合わせで

「再会できて、それまでできなかったことを取り返そうとして、それがただの自分の自己満足だと思い知らされた。」

一夏に……一夏に会いたい。

彼に否定してほしい、私の行いが間違っていないのだと言って欲しい。

「一夏……」

しかし手に持ったノートが、それを許さないのだ。

結局答えの出ないまま、鐘が鳴るまで呆然と立ち竦んでいた。



「……一夏、すまないが私が稽古をつけると言った件、今日は用事で無理になつた」

「え？ ホントか!？」

「……そういう訳だ、すまない」

「あ、おい！ 待ってよ、箒！」

放課後、聞こえてきた内容に思わず振り返った。

そこから漂ってきた柑橘類（こんわく）と消毒液（かなしみ）の匂いに、彼の色と篠

ノ之さんのぐちゃぐちゃな色が視える。

その光景に直感的に大きな懸念が沸いた。

「……ッ」

「クルルー？えっ？うん、わかったよ。でも何するの？」

「……ッ」

「え？しののんがどうしたの？あつ！待つてよクルルー!？」

すぐに話しこんでいた本音さんに通訳をお願いすると、彼の下へ急いで移動する。

「まいったな……これじゃどうしようもないぞ……」

「……」 チヨンチヨン

「ん？なんだ、クルヴィか。どうしたんだ？」

「……ッ……ッ」

「あー……すまん、俺手話解らないんだ。できれば筆談で……」

「そんなあなたに呼ばれて飛び出てジャジャジャヤーン！」

「の、のほほんさん!？」

「クルルーがおりむーに聞きたいことがあるんだつて。できれば急いで欲しいつて

言つてるよ」

「俺に聞きたいこと？」

「・・・ッ!・・・ッ!」

「ん〜とね、しののんのの様子がおかしいかったけど、何か知らないかって〜」

「箒か・・・、それがよくわかんねえんだよな。昼休みが終わったくらいから妙に落ち込んでてさ、ISのことを教えて貰う予定だったんだけど、突然今日は用事があるからってさ・・・」

「ッ!」

彼の言葉を聞いた時何となく原因が視えた。

昼休みで彼女に何かがあつたとすれば、それは間違いない私だ。

ISに関する基礎知識やセシリアさんの情報を簡潔にまとめたノートを渡したことが、彼女を悲しませるような結果を作ってしまったのだと私は瞬時に理解した。

傷つけてしまった。

本当に何気なく、私が渡すよりは彼女に役立てて貰った方が有効だと、何の含みもなくノートを渡したのだ。

だけどそれが彼女の何かを傷つけてしまった。

あの時視えた彼女の色を思い出す。

心に映える真紅は彼女の強い意志を垣間見せていた。

しかしあの時の彼女の色は、深い悲しみと自責の色、その他にも様々な感情の色がぐ

ちやぐちやに混じり合っていた。

彼女をそんな風に傷つけてしまったのは、私だ。

何気ない善意の推し売りで、彼女の心を踏みにじつてしまったのは、私だ。

「……ッ」

だから謝らなければならない。

自己満足と言われようが、何一つでも得られない徒労だとしても、人を悲しませるのはイケないことなんだ。

はるか昔の記憶の中にある、前世の母の言葉。

『人は強いと誰かを傷つけて、弱いと誰かを妬んでしまうから。あなたもいつか何気ないことで、人を傷つけてしまうかもしれないわ。だから、誤りは謝罪と誠意で埋めなければならぬ。相手の心に踏み込むことは、それほど難しいことなの』

友達と喧嘩してしまって、どうすれば仲直りできるかと母に聞くと、私の正面で目を見ながら優しく微笑んで語ってくれた。

『人を傷つけてしまったらね、ちゃんと素直に謝りなさい。受け入れられなくても、そのまま関係が壊れてしまっても、踏み込んだ心の中にあなたの謝罪を刻みなさい。そうしてちゃんと謝れたなら、もう一度喧嘩しても大丈夫』

母に教えられたことは今でも全部覚えてる。

私もそれを姉妹達に教えて来たのだから。

今こそ、その教えを活かす時だ。

「ッ！」

「クルヴィ!?!どうしたんだ!?!」

「クルルー!?!」

私は走り出した。



彼女の色を探して、探して、悲しみの残り香を追って、ようやく備えつけられたベンチに座っているのを見つけた。

顔を俯かせながら、必死に何かを耐えるように、胸の内から溢れるものを抑えつけるように、ノートを弱々しく睨んで震える彼女。

感情（いろ）はぐちやぐちやだ。

いつ溢れ出てしまうか解らない。

なら私が彼女の何を傷つけたのかもつと知る必要がある。

（お願い・・・）

だからこの閉じられた目を、私だけの世界を視る為に、

(ちよつとだけ我慢してね、私)

洗脳に抗つて瞳を開けた。

視界が開くと同時に、激しい頭痛が断続的に襲ってくる。

その痛みを我慢しながら彼女の心の色を明確に理解していく。

そしてその胸を満たす強い感情に気付いた。

桜のような淡いピンクと激しく燃え立つような牡丹が混ざつた色。

それはとても甘くて、とても苦い、むず痒いけど居心地の良い、誰かを想う感情。

恋だ。

彼女は誰かに恋してる。

誰に？そんなものは彼以外にしかありえない。

理解すると同時に、私の胸も苦しくなった。

共感ではない、あくまで自分の中で彼女の感情に対するショックを受けているのだと

努めて冷静に判断する。

(なんで？篠ノ之さんが彼が好きなのは当然なのに・・・どうして苦しいの？)

彼は友達だ。遠い遠い地で、秘かに邂逅を望んでいた人なのだ。

(あれ・・・？)

そこで違和感を覚える。

私は彼と友達になれて、なんであんなに喜んだのだろうか？

ずっと想い続けてきたというのがあるのは解る。でもそれだけじゃない気がした。

ずっとずっと想い続けて、彼の色を視た瞬間に強く魅せられた。

知りたい（・・・）と思った。

（あ・・・そっか）

そのとき、世界がフツと変わった気がした。

裏にしていたカードをクルつと表にするように、悩んでいた解答がなんてことのないものだったのだと気付くように、私は自分の中にある感情を理解した。

（私は・・・彼のことが好きなんだ）

恋だ。

私は彼に恋していた。

おそらくずっとずっと前から、私は彼に恋していたんだろう。

そして、自分の行動が彼女に与えた影響を、臍気ながらに解った気がした。

（そうなんだ・・・彼女も彼が好きで、私も彼が好きなんだ・・・）

どうすればいいのか、もう解ってる。

だから共感覚ではない、封印されている超能力の洗脳を、外した。

「!!?!?」
「」
ツツ

叫び声は上がらない。そもそも声帯が機能していないのだ。

だから頭が爆発しそうな激痛を唇を噛み締める事で我慢した。

全身を強張らせながら、篠ノ之さんに少しづつ痛みから意識を逸らして行く。

そして彼女の前に立って、痛みを悟らせないようにできるだけ平静を装える表情を作った。

「お前は……」

「……」ペコッ

「ッ！一体何の用だ、ノートなら後で一夏に渡す」

強く拒絶するような語調で私との会話を切り上げるように立ち上がる篠ノ之さんを、私は手を握ることで制した。

最初は目を見開いている私に驚いたような顔で見つめていたが、段々と怒りを滲ませて眼も睨み目へと変わっていく。

「離せ……」

「……」フルフル

「ッ！離せええ！」

篠ノ之さんが武術を使って私を振り払おうとした。

だけど今の私にはその意図すら予測できる。

組み付こうとした逆の手も握って、そのまま素早く両手を私の胸に当てさせた。

「ツ!？」

予想だにしない私の行動に驚かされ、一瞬動きが止まる篠ノ之さん。

その一瞬で、私は精神感応（テレパシー）を発動させた。

『こんにちわ、篠ノ之さん』

「ツ!?!誰だ!?!」

『初めてお話しますね、クルヴィ・エレフセリアです』

「何……?この頭に直接響くような声は、お前が……?」

『驚かせてすいません、この声はISのプライベート・チャンネルを人間ができるようにしたものだと思ってください』

案の定、混乱した様子の篠ノ之さんをゆっくりと落ち着かせるように話しかける。

その間も目の前が霞むくらいの激痛が続いているがおくびも出さずに会話を続けた。

『あなたと直接お話がしたくて来ました。返答は頭の中で考えるだけで大丈夫です』

『……私に何の話があるというのだ』

『はい、まずは謝罪です。あなたの心を無遠慮に踏みにしたことを謝ります』

『ッ!?!』

『ごめんなさい、あなたが彼のことを好きだって気付いていれば……』

『ッ!?!』

『そんなあなたの心を、無自覚に傷つけてしまつてごめんなさい……』

「ちよ、ちよつと待て!?!わ、私は別に一夏のことをす、すすすす!?!」

『?ああ、なるほど、そういうことですか……』

突然大声で抗議を始めた篠ノ之さんに首を傾げるが、彼女の表情が羞恥に染まつていたことから共感覚を使うまでもなく心中を察した。

『篠ノ之さん、お話し前に言つておきたいことがあります』

『な、なんだ……?』

『はい、私はい、一夏あ……さんが、が好きです』

初めて呼ぶ名前にむず痒くなりながらも、はつきりと彼への想いを伝えた。

『ッ!そ、そうか……やはり……』

『はい、彼に恋しています』

頭がボウつとするのは頭痛のせいだけではないだろう。

だつて篠ノ之さんの瞳には、顔を真っ赤にした私が映っているから。

『そして、篠ノ之さんも彼に恋しています』

『い、いやだから私は一夏のことなど・・・!』

『彼の事をととてもとても大切に想っています』

『ち、違うっ・・・!』

彼女はどうかやら恥ずかしくなると手が出てしまう人のようだ。

さつきから手を振り解こうと技をかけようとしてくるが、私がそれを先読みしてやり過ごした。

でもそろそろ頭痛で余裕がなくなってきた、なので動揺で生じた隙に彼女の身体に抱きついた。

「なっ・・・!?!」

『彼の力になってあげたいって、想って、ますよね?』

途切れそうになるテレパシーを必死に繋ぎ合せる。

涙が出そうだけど、それ以上に彼女の彼への感情がとても愛おしくて、私は額を冷や汗でびっしょりにしながらも微笑むのをやめられなかった。

『大丈夫、あなたの想いはとても素晴らしいモノで、この世の何にも変えられない凄いモノなんです』

『ち、違う・・・』

『違いますよ』

『違うんだ！私は、私は結局自分のことしか考えてなくて……！お前みたいに一夏を想いやつてやれなくて……！』

『それでいいんですよ』

『な、に……？』

『私も、あなたも、彼の感情を考慮してないのは同じです。でも、それでいいんです。巡り合ったお互いが、解り、合いたいって、ぶつかって、擦れ違って、でもお互いを想い合う、そういう、ものなんです』

『……』

『我儘にぶつかり、あつて、同じベクトル、を、探して、そうして、寄り添う』

『それが……』

篠ノ之さんの身体も心も、震えて、奮えていた。

落ちそうになる意識を呼び起こしながら、私は篠ノ之さんの問いに途切れがちのテレパシーであつて、それだけははっきり答えた。

『そう、恋です』

頭に暖かい何かが落ちてきたのを感じた。

私より篠ノ之さんは身長が高いので、抱きつけば自然と頭が胸に埋まる。

だから上から落ちてきたものが篠ノ之さんの涙であることに気付いた。

『すまない．．．すまない．．．！私は．．．！！』

『はい、確かに謝罪は頂きました』

『私は．．．お前が．．．羨ましかった．．．！！』

『私も、あなたが彼にISのことを教えるって聞いて盗られたって恨んじやいました』

『ずっと．．．ずっと好きだったんだ．．．！！一夏と．．．一緒に居たかったんだ．．．

！！』

『私も、彼に一杯伝えたいことがあります』

『う．．．くつ．．．ううあつ．．．』

『ずっと、我慢してたんですよね？頑張りましたね、偉いです』

私を抱きしめ返して肩に顔を埋めながら呻くように泣き続ける彼女の背を、あやすようにゆっくりと叩いた。

ああ、伝わった。解りあえた。

だからもうちよつとだけ、もうちよつとだけ頑張ろう。

ここで倒れたら心配させちゃうから、もうちよつとだけでもって？

しばらくすると落ち着きを取り戻した篠ノ之さんが、少し恥ずかしそうに微笑んで口を開いた。

「エレフセリア」

『はい』

「その・・・だな、えつと・・・」

歯切れ悪くもごもどと話す篠ノ之さんの言葉を辛抱強く静かに聞く。

「・・・ありがとう」

小さく、蚊の鳴くような囁きだったが、彼女は確かに感謝の言葉を口にした。

私はそれを聞いた後、ゆっくり拘束を緩め、彼女の顔を真つ直ぐ見ながら微笑んで言った。

『どういたしまして』

彼女は赤くなつた目を見開いたが、すぐにくすぐつたような笑みを浮かべた。

しかしその笑みも私の顔を見た瞬間サツと青褪めた。

そろ、そろ、限界、かな？

でも、これ、だけ、これだけは言わなくちゃ。

『篠ノ之さん、一つ、お願い、してもいいですか？』

「そんなこと言っている場合か!?!自分がどんな顔をしてるか解つてるのか!?!」

解つてる、きつと酷い顔だ。

だけど、微笑みだけは忘れない。

こだわりだけは譲れない。

『模擬戦の後にでも、と．．．思ってたん、です．．．けど．．．』

「後で聞いてやるから!!今は早く保健室に行くぞ!」

そういいながら私を抱き上げる篠ノ之さん。

わあ．．．。お姫様だっこだ．．．。

霞む視界の中で焦った篠ノ之さんの顔が見えた。

ああ、心配かけちゃったなあ。

でも、あと少し、あと一言だけだから。

『私と．．．、お友達になつてくれませんか．．．?』

「ツ!!ああ、なつてやるとも!だからもう喋るな!!」

『あり．．．がとう、箒さん．．．』

ブツつとブレーカーが落ちるように断絶する意識。

最後に、箒さんの叫ぶような呼び声が聞こえた気がした

幸せな思い出くネリネく

ここは……どこだろう……？

真つ暗だ……。

あれ……おかしいな……？いつもは色や匂いを感じれば何か視えるのに……。

そういえば、箒さんはどうしたんだろう……？

私はちゃんと謝ることができただろうか……？

身体と頭がだるい……鉛みたいだ……。

ああ、そつか……ちよつと無茶しちやったんだな……。

洗脳（プログラム）に抗うのは久しぶりだったな……妹のESPが暴走した時以来

だっけ……？

まあ、箒さんとお友達になれたから良かったけど……。

ここに私を運んだのは箒さんだろうか……？

なら、そろそろ起きてお礼言わなきゃ……。



「……」

「あ、織斑先生！エレフセリアさんが起きましたよ！」

「ああ、見えてるよ山田くん」

保健室からエレフセリアが倒れたという連絡が入ったのは放課後から一時間ほど経った時だった。

慌てて飛び出して行った山田くんの次に急いで駆けつけると、篠ノ之が目を腫らしながらベッドに眠るエレフセリアを看病していた。

事情を聞いただしてみると、事は中々に重大だった。

しかし解せない、彼女が洗脳に抗ってまで篠ノ之に会話を求めたその真意が。

彼女の性質は学園での行動から大体推察できたが、その身に受ける苦痛がどれほどのものか解らない程頭が悪いわけではない。

とりあえず本人に事情を聞くことにして、看病をしてみると言ってゴネた篠ノ之は一夏に迎えに来させたが、エレフセリアの様子を見た一夏までも看病すると言いだしたので、起きたら報告すると言って強制的に外に追いだした。

それから2時間ほど経って、ようやくエレフセリアが目を覚ました。

指を動かす事も億劫そうな様子に山田くんが顔を歪めたのを横目で一瞥し、私は尋問

の内容を緩める方向で修正した。

「さてエレフセリア、お前に聞きたいことがある。内容は解るな？」

「………ツ」トンツ

ゆつくり伸ばした指先で、机を一度だけ叩いた。どうやら返答しているらしい。

「篠ノ之にESPを使つたらしいな」

「………ツ」トンツ

「一夏のことか？」

「………ツ」トンツ

「……洗脳に抵抗してESPを使用してまで会話したかったのか？」

「………ツ」トンツ

聞けば聞く程、なんとまあ呆れた奴だと私は溜息を吐く。

こいつの事情は知っていたが、まさかここまで馬鹿だとは思ひもしなかった。

そして、そんな奴を今の今まで警戒していた私自身を笑いたくなくなった。

こいつは馬鹿だ。ただただ真つ直ぐな、折れも捻じれもしない一筋の線。

私達大人が忘れてしまった、純粹さの塊のような奴。

研究所（あそこ）からの手紙の内容（……）は、確かに正しかったようだ。

私はもう一度溜息を吐きだした。

「最後に聞いておこう。篠ノ之にそこまでした理由は何だ？」

「……………」

答えは返つてこない。当然だ、こいつは喋ることができない。

だからこれは自分自身への問いかけ。

こいつを理解してやるための、私なりの反省だった。

「クラス代表者の模擬戦は休め、その様子ではISの起動も辛かろう」

「…………ツ」トントントント

眉を顰めて指で机を二回鳴らす。

そして僅かに首を振るような動作を見せた。

拒否しているのだろう。しかしその弱った姿からは説得力は感じられない。

それ故に私の判断は覆られない。

「ダメだ、今の状態を自ら省みられないようなら模擬戦どころか授業の参加すら認められない。医者判断では一日安静、戦闘に関しては1週間認められないそうだ」

「…………ツ！…………ツ！」トントントツ…………トントントツ…………

「…………エレフセリアさん、今のあなたでは少しの無理でも大事に成りかねないんです。約束を破るのは心苦しいでしょうが…………」

「……………」

山田くんの心情を読み取ったのか、先程まで見せていた氣勢は落ち着いていた。

ふむ、こいつには感情の読み取りやすい山田くんの言葉の方が余程効果があるな。

何はともあれ、これ以上騒がず大人しくしてくるのなら教師として安心できる。

「そういう訳だ、黙って寝ている。山田くん、私は仕事に戻る」

「あ、はい！私もすぐ戻りますね！」

「……」ペコツ

やることはやった。手紙（・・・）の裏付けも取れた。

ならば後は呼び出される前に残してしてきた今日の仕事をこなすだけだ。

職員室に戻る為保健室を出てみると、一夏と篠ノ之、そしてエレフセリアのルームメ

イトである布仏が廊下で待ち構えていた。

「千冬姉え！クルヴィは大丈夫なのか!？」

「はあ……学校では織斑先生と呼べと何度言ったら解るんだお前は……」

「織斑先生！クルヴィは、あいつは起きたんですか!？」

「クルルーに何があつたんですか!？」

それぞれエレフセリアの安否を口にしながら詰め寄ってくる。

まだ二日しか経っていないのに随分馴染んでいるものだと、改めて彼女の性質を確認

させられ苦笑が漏れた。

しかし例え友人であつても、あいつの情報はその易々と話せるものではない。なので詳しい事情は避け、症状だけを簡潔に述べる。

「1日安静、1週間の激しい運動は禁止だそうだ。深刻な病状ではないから安心しろ。あとクラス代表者の模擬戦には出られないので、織斑とオルコットはそのまま不戦勝となる」

「そうですか・・・良かった、本当に・・・！」

「・・・なんか納得いかねえけど、クルヴィがそんなんじや仕方ねえよな」

「・・・」

「面会するならあまり時間をかけるなよ、奴もだいぶ疲れているようだからな」

その言葉に一夏と篠ノ之は喜々として保健室に入っていくが、布仏だけはその場で佇んでいる。

何やら思案気な表情で俯いているが、もしや何か知っているのか・・・？

まあ、奴なら更識から何かを聞いていてもおかしくはない。

余計な事を言わないように釘を刺しておくか。

「布仏、何を聞かされたか知らんが、エレフセリアに関してはまだ話すなよ。あちらにも色々あるようだからな」

布仏が顔を上げて何かを言いたそうにしているのを無視して、そのままその場を切り

上げて去った。

やれやれ、ガキ共の世話は毎度苦勞させられる。あのバカも何か企んでいるようだしな……。

先行き不安な未来に溜息を吐きつつも、今日の仕事を終わらせるために職員室へと急いだ。



「山田先生！クルヴィは大丈夫なんでしょうか!？」

「篠ノ之さん！静かにお願いします！」ボソボソ

「あつ……す、すいません……」ボソボソ

箒さんの声が聞こえた。

ようやく戻り始めた感覚が、他にもい、一夏さんや本音さんの色をぼんやりと捉える。

「クルヴィ、倒れたからって心配したんだぜ？特に箒なんて」

「よ、余計な事を言うな！」

「いてえ!?ホントの事だろ!？」

「クルル、大丈夫なの?？」

「だから静かにお願いしますすー」ボソボソ

『す、すいません』ボソボソ

なんだか騒がしいや、みんな元気がいいなあ……

あ、そうだ。心配かけちゃったことを謝らないと……

「……ツー！」モゾモゾ

「エレフセリアさん!?まだ起きあがっちゃ駄目ですよ!？」

むう、起きあがろうとしたら山田先生に押し留められてしまった。

仕方ないのでみんなの方を向きながら手を合わせて拝む様な姿勢で謝ってみた。

「……ツ……ツ」へこへこ

「あははく大丈夫だよクルルル。心配したけど無事だつて聞いて安心したからく」

「そうだな、以外に元氣そうで良かったよ。でもあんまり無茶すんなよ?」

「そ、そうだぞ!あんな風に目の前で倒れられたら、ゆ、友人として気が気でないからな

!」

それぞれの言葉を聞いて安心して微笑む。

良かった、許して貰えたようだ。

「あれれ?しののん、いつの間にクルルルとお友達になったの?」

「そういや、保健室に運んだのも筈だったよな?放課後なんかあったのか?」

「い、いや、それはだなんっ……」

箒さんの言葉が引つかかったのか、本音さんが疑問を口にするのに合わせて一夏さんからも質問が出た。

箒さんはどう説明すればいいのか解らず言葉詰まらせている。

……まあ、その内容が一夏さんが好きとか一夏さんにどうしてほしいとかの話なので、箒さんだけじゃなく私も非常に困るわけだが。

やはり告白と言うのは相応の機会と万全の準備を持つて臨むべきなのだ。

こんなロマンもへったくれもない凡ミスで恋を曝すほど、乙女の純情は軽くない。

そういう訳で、少し顔が熱くなっているのを自覚しつつも箒さんへ援護射撃を行うことにした。

「……ッ」クイクイツ

「ん? どうしたのクルル?」

「……ッ……ッ……ッ」

「ふむふむ……あゝなるほどね〜! それはおりむーには話せないよ〜」

「え? のほほんさん、どういうことだ?」

「ダメだよおりむー、女の子の秘密を探っちゃ〜。山田先生もそう思いますよね〜?」

「え? あ、そ、そうですね! 織斑くん、ダメですよ! 女の子には知られたくない秘密が沢

山あるんですからー！」

「そ、そうだぞ一夏！お前はデリカシーが足らん！」

「いきなりみんなしてなんだよ!？」

本音さんのフオローはうまく行ったみたいだ。

流石はお友達1号。

今度お礼するものを考えておかなければ。

でも、このままだと一夏さんが弾きだされて可哀想だ。

私も何かフオローしなくては！

えっと、例えば・・・うん、このくらいなら問題ない、よね？

恥ずかしがり屋な箒さんの危機感も煽れるし、彼の意識も引けて一石二鳥だ。

「・・・ッ！」クイクイツ

「うんうん、わかったよクルルー」

再び本音さんに詳細を伝えると、ワクワクしてそうな笑顔で了解してくれた。

「おりむー、クルルーがちよつとベッドから起こしてほしいって〜」

「ん？まあ、別にいいけど」

本音さんの言葉に何の警戒も抱くことなく、一夏さんがベッドに近づいてくる。

少しドキドキしている。

一夏さんが布団を剥いで、私が後ろに倒れこまないように腰に手を廻してきた。あの色がこんなに近くにある。

私の左手を握って顔を息がかかるほど隣に寄せると、優しくゆつくりと背中に力を入れて起こしてくれる。

ちよつと恥ずかしいけど、意外と冷静だ。

そしてベッドのふちを背もたれにできるように動かしてくれると、私を起こし終えたと思っっている一夏さんが離れようとした時、まだ近くにあつた思いつきり手を引き寄せた。

完全に油断していたため、あまり強い方ではない私の力でも簡単に体幹を崩す事ができる。

目の前を覆った驚きの色を見せる顔を右手で抑えつけると、そのまま一夏さんの唇と接触するように抱きこんだ。

「むぐう・・・!?!」

「なあ!?!」

「ひゃくクルル―情熱的だ〜」

「え、えええええエレフセリアさん!!?!」

わ、わあ・・・!男の子の唇ってこんな感触なんだ・・・。

熱くて、ちよつと乾いてて、唾液がちよつと甘い……。

それに、なんだか頭の中が蕩けて行くみたいに気持ちが良い……。
もつと味わつてみたいけど、次の機会までにとつて置かなくっちゃ。

名残惜しい思いを噛み締めながら、私はそつと唇を離した。

「く、クルヴィ……？えつと、今のは……一体……」

「クルヴィ！いい、いきなり何をするんだ！どういふことか説明して貰うぞ!!」

「……ツ……ツ」

「ええつとね、身体を起ここして貰つたお礼だつて」

「そ、そうなのか？」

「そうそう」

一夏さんは釈然としないながらも一応納得したようだ。

……なるほど、これは難しそう。これが鈍感系主人公の実力か……。

箒さんの方は益々猛つて行くが、フォローは本音さんに任せてあるので問題ない。

「そんな訳なからう！正直に吐くのだ!!」

「モタモタしてたら私が面倒見ちゃうよ、だつて」ボソボソ

「ツ!!」

「急にボソボソ喋り出してどうしたんだ？」

「な、何でもない！それより一夏！早く寮に戻って勉強するぞ！ただでさえ時間がないんだからな！」

「ちよ、引つ張るなよ！それにまだ挨拶してないだろう！」

箒さんと一夏さんの色が部屋を出てどんどん遠ざかって行く。

しばらくしてから本音さんがサムズアップしてくれたのが匂いで視えたので、私もそれに倣って返した。

山田先生はしばらく固まっていたが、やがて再起動すると不純異性交遊についての注意を長々と説教し始めた。

巻き込まれない内に本音さんが別れの挨拶をして部屋に戻っていく。

私は自業自得なので、誠心誠意叱ってくれる先生の言葉を粛々と受け止めた。

誰かに叱って貰うのは本当に久しぶりだったので、萎縮しながらも沸いてくる喜びを隠しきれずについ微笑んでしまう。

「もう、ちゃんと聞いてるんですかエレフセリアさん！」

「……ッ……ッ……ッ」コクコクッ………ニコッ

「はあ……なんで笑顔なんですかあ……」

誰かと一緒に過ごすって、笑ったり怒ったり悲しんだり、笑われたり怒られたり悲しまれたり、そういうことの積み重ねなんだということ、私は実感した。

そしてその何でもないような積み重ねが、何よりも幸福な思い出なのだ。

その芯の強きかなくサギソウく

「……来ないな」

「……ああ、来ないな」

「来ないね〜」

「……」コクコクッ

クラス代表者を決める模擬戦の当日。

どこからか今日男性IS操縦者の模擬戦が行われるという情報が漏れ、アリーナには既にクラス以外にも多くの生徒が詰めかけていた。

一夏さんの注目度がどれほどものかというのが見て取れると言うものだ。

しかし予定の開始10分以上過ぎても模擬戦が始まらないとあってか、疑問の飛び交いがざわめきとなって広がりがつつあった。

一夏さんの情報収集のために用意されるはずだった専用機が未だに届いていないのだ。

代わりに練習機を申請しようにも、この時期はタッグトーナメントに備えて2、3年がそれぞれの集大成を披露しようと燃えている為、予約は連日いっぱいいっぱい空き

がない。

必然的に専用機の到着を待つしかなくなる訳だが、そろそろ何か放送でも入れなければセシリアさんのこめかみがすごいことになっている。

その様子を箒さんに誘われたので、通訳の本音さんと共に一夏さん側のピットで眺めている。

「うわっ、セシリアめちやくちや怒ってるな・・・」

「あれだけ啖呵切っておいて直前になって待ち惚けではな・・・」

「このままだとおりむーのシワ寄せが凄いよ」

「・・・」コクコクッ

ここは時間稼ぎの意味で何か余興でもしないと本当にセシリアさん置いとくにしても興味本位の生徒達が帰ってしまうかもしれない。

それは織斑先生の狙い的にも彼の事情的にもあまりよろしくない。

ISを動かせるとはいえ、まだ学園の生徒達の中には一夏さんが「男性」であるということでどこか軽視している節がある。

先日、クラスの一人がこう言っていた、『今からでも遅くないから降参すれば？男が女より強いなんて昔の話だよ？』。

この意識がある限り、彼の立場は「見世物パンダ」の域を出る事はできない。

唯一の男性 I S 操縦者に物珍しいという評価では、今後の一夏さんが自分の身を護るには足りない。

一夏さんに集まる人達が、皆“善意”を持っていてる訳ではないのだから。

なら手つ取り早くその評価を覆すにはどうするか？

織斑先生の狙いはそこにあるんだろう。

眠りこけた臉を盛大なデスメタルで叩きで起こすように、実力を魅せ付けることによつて彼女達に知らしめるつもりなのだ。

お前達が強いのは“女”だからではない“I S”があるからだ、と。

そのためにも観衆は多ければ多いほど良い、実感は噂となつて広がり、噂は評価となつて繋がる。

なら私にできることは？

・・・戦闘は禁止されてるけど起動くらいなら何とかかなるし、それに一つの余興にはなるかもしれない。

「・・・ツ・・・ツ」

「へくクルルーの専用機つてそんなこともできるんだ。でもクルルーは大丈夫なの？」

「・・・ッ！」コクコクツ

「ん～一応織斑先生に聞いてみるね～?」

本音さんにはホントお世話に成りっぱなしだ。

中々思いを伝えるのが難しい私の頼みに、いつも二つ返事で通訳を買って出してくれるのは心苦しくもあるが素直に嬉しい。

今度おいしいケーキでも買ってきてあげよう。本音さんはお菓子類が大好きだし。

「織斑先生、クルルーからの伝言です～」

「・・・なんだ、言ってみろ」

「『時間稼ぎに、余興を一つお披露目してもよろしいでしょうか?客寄せもできますよ?』です～」

「・・・ふむ、いいだろう。ただしISの起動は部分展開だけだ」

・・・ばれてる。

やっぱり織斑先生はすごいな、色も感情を抑えてるから普段はまったく視えないし。最強と呼ぶに相応しい壮大さだ。

この人にとっては頂きに立つ為の大会すらも些事に過ぎなかったのだろう。

唯一の家族である弟については、かなりの愛情を注いでいるに違いない。

・・・私も姉妹達を可愛がっていたので実感が無いが、織斑先生ってやっぱりブラコンなんだろうか?

「・・・エレフセリア、余計なことを考えている暇があったらとつとつと行け」
「ツ!? ツ!」ビクウツ!

思わずビシイッ!つと敬礼した後、一目散にピットからアリーナへと駆けだす。
なんでESPもないのに心が読めるんでしょうか?

あれですか?最後に愛は勝つんでしょうか?

私も見習いたいです。

「クルルー頑張つてね〜」

「のほほんさん、クルヴィは何をするつもりなんだ?」

「時間稼ぎと客寄せだつて〜。やったねおりむー!乙女が増えるよ〜!」

「これは良い方に受け取つといた方がいいんだろうか?」



喧騒に包まれるアリーナに、気付けば静かな音色が響いていた。

空耳にしては耳障りのいい、細く、金属が共鳴して浸透いくような音。

セシリアはその音色をハイパーセンサーによつてすぐさま拾い上げると、その出所を探ろうと視覚を強化して音源に耳を澄ました。

一人の見知った少女、先日友人としての握手を交わしたクルヴィ・エレフセリアが、ピットの入り口付近で何かを触れているような動きをしている。

「部分展開・・・？アレは何かの武装ですの・・・？」

薄紫色の花弁のような形をした浮いた何かを部分展開した腕部の指で撫でるように触れる度、反響する薄く儂い音色が拡散して、セシリアの苛立っていた心が静められていく。

「綺麗な音色・・・しかしこの聞き覚えのない曲は・・・？」

いつしかアリーナはこの音色だけが響いていた。

目を閉じながらゆったりと椅子に座って思い出を追想するような、そんな情景と共にセシリアは一つの記憶を思い出していた。

あれは自分がまだ幼く、事故で他界した両親が健在だった頃・・・。

父は婿養子で、いつも母の実家に対して強い引け目を感じ卑屈な態度ばかりとっていた記憶しかない。

そんな父に呆れたように、母はまるで諦めたかのように家を切り盛りしていた。

だが追憶の中の自分に向ける父の顔は、まるで誇りを持った母の顔となら変わりのない力強い笑顔だった。

『セシリア、よく聞きなさい』

小さい、本当に小さい自分の目を見つめながら話しかける父。知らない、こんな父の顔は見たことがない。

『父さんは母さんに惚れただけの、レストランでバイトをしていたしがない店員だった。高いスーツを着こなす自信も、家を護るだけの才能も、上流階級で生きて行くだけの教養もない』

言っていることは記憶の中で聞き慣れた、酷く情けないことばかりだ。

だけど、何故か誇りに満ちていて、父は確かに「男」の顔をしていた。

『それでも母さんに愛して貰えたことは父さんの誇りだ。だけど父さんは母さんに迷惑掛けてばかりだから、唯一勞つてやれるとしたら中途半端に磨いた料理の腕前ぐらいだな』

そういつて父は苦笑いしながら私の小さな手の上に自分の手を乗せた。

冷たい水や火の熱などでボロボロになった、貴族には相応しくない下々の身分の手だ。

『会食の料理と比べるべくもなく劣る料理を、母さんはいいと言ってくれる。それだけは父さんの自慢なんだ』

ああ、そんなことも言っていたかもしれない。

何故忘れていたんだろう。男は、「父」は、情けない人だけど、ちゃんと母と自分を

愛していたのに。

確かこの後父はこう言ったのだ。

『いつか：お前に大切な人ができて、辛さを顔にこぼしていたなら、自分の願いをそつとしまつて、黙って隣で労つてあげなさい』

『だまつて・・・？』

『そうだ、夫婦円満の秘訣さ。何も言わないのが夫婦の心遣いだ。黙つて・・・願ひだけを込めて・・・』

情けなくなつてない、父は立派な紳士（ジエントルマン）だった。

ちゃんと戦つていた、ちゃんと家族を愛していた。

自分は・・・そんな大切なことを忘れていた・・・。

「お父様・・・」

ふと気付くと、静かに響いていた音楽は終わつていた。

目を開くと歪んだ視界が広がつていて、自分は泣いているのだと理解した。

慌てて涙を拭うと、いつの間にかクルヴィは部分展開を解き、一礼のあとにピットの奥へと戻つていくところだった。

今の音楽はクルヴィの専用機から出ていたのだろう、しかしそんな機能を持ったISなど聞いたことがない。

体調不良のためクラス代表者から辞退したらしいが、もし戦うことになっていたらどんなＩＳが飛び出していたのか想像もできない。

先程の追憶を踏まえてそんな考えに耽っていると、歓声と共にピットからＩＳらしき機影が飛び出してきた。

確認するとそれは先程から待ちに待った今回の模擬戦の相手、そして男の分際で自分に交友を求めて来た同じ年の男性。

家の財産を目的に近づいてきた有象無象の輩と同じ男であるクラスメイト。

いや、それを今からそれを見極めるのだ。

彼が今の時代であっても、父のように「男」として生きているのかを。

「日本の男性は随分と淑女（レディ）を待たせるのが好きなのですわね？」

「勘弁してくれよ、スーツが決まらなきや淑女（レディ）にも失礼だろう？」

「あら、お上手ですわね。なら一曲ご一緒してくれませんか？ 私とブルー・ティアーズが奏でる円舞曲（ワルツ）を！」

「悪いがフォークダンスしかやったことねえよ！」

彼がこのセシリア・オルコットの友人足り得るかを。



ISを触れた時理解した、これがどんな目的で造られたのか、千冬姉えがどんな景色を見ていたのか。

自分は護られていた、3年前のあの時も、それよりもずっと前から護られていた。箒が渡してくれたクルヴィの作ってくれたというISやセシリアに関するノートの内容最後にこう書かれていた。

『ISは力です。己の道を駆け抜けるための力です。織斑先生はその力を、あなたの為に使い抜きました。あなたもどうか、自らの力の使い道を見つけられるように考えてみてください』

その意味がようやく解った。

偶然だろうが必然だろうが、俺は「織斑千冬の弟」という手に余るネームバリューに組み込まれている。

同時に期待されていて、それを裏切れることは千冬姉えの名誉を傷つける事になるのだ。

こんなプレッシャーを受けてもなお、千冬姉えは俺を救うために駆けつけてくれた。なら今度は俺が家族を護る番だ。

俺は魅せなきやいけない。

織斑千冬の弟は、伊達じゃないってことを！

だからこんなところで負けられない！

「よく避けますわね！素人にしては上出来ですわ！」

「そいつはどうも!!」

くそつ、表示される攻撃警告は正確だ、俺が白式の反応に追い付けてない！

勉強してそれなりにいけるんじゃないかって意気込んでたけど、やつば視るのとやるのとじゃ大違いだ。

このままじゃ削られるだけで何もできずに撃墜される、何か装備はないのか？

パラメーターなどが映る網膜ディスプレイに、展開可能な装備が表示される。

そこには近接格闘用のものとおもしき太刀の形をした剣、これだけか!?

……このまま無様に落ちるよりはマシか、ちようど箒のしごきで木刀振ってたしな。

「遠距離射撃型のわたくしに近距離格闘装備で挑もうなんて、度胸は買いますけど無謀と言わせて貰いますわ！」

「やってみなくちゃわからねえ!!」

セシリアのスターライトMK-3から放たれるレーザーを、空中で身体を転がすように動かして避ける。

空を飛ぶという馴れない動きに戸惑いはあるが、徐々にマシになっていくのが解る。

勉強してなかったら未だにおぼつかない動きをしてたかと思うと、クルヴィの予習ノートには感謝しても仕切れない。

距離を取り過ぎないよう中間距離で弧を描くように上下左右に動き回りつつ、砲身の狙いが定まって止まった瞬間に下に潜り込んで一気に詰めた。

目を見開き驚いているセシリアの顔がはつきりと確認することができた。

よし、これならイケる！

解りやすく説明された対策の内の一つに、射撃装備の特性として遠距離での修正は容易く行えるが、近・中距離での突発的な動きには修正が難しいということが書かれていた。

もっと詳しく説明されていたのだが、とりあえず理解したのは後ろに下がらず動き回って近づけてことだ。

これはなんかお礼しないとダメだな、女の子の喜ぶものってなんだろうな？

「せいっ!!」

「くうっ!?!」

余計なことを考えていたのがいけなかったのか、ブレードはとつきに構えられたスターライトMK. 3で防がれてしまった。

「もういつちよお!!」

今度は雑念を振り払い、防御ごと叩き斬るつもりでブレードを振り上げる。

その瞬間、まったく意識していなかった衝撃が横っ腹に直撃し、大きくバランスを崩した俺は錐揉み状態になりながら吹き飛ばされた。

「な、なんだあ!?!」

なんとか姿勢を整えて停止すると、距離をとったセシリアが感心したような表情でこちらをみていた。

「初見以前に素人同然のあなたが、私の攻撃を避け続けた上にまさか近づかれて攻撃を受けるとは思ってもみませんでしたわ」

「優秀な先生とインストラクターが鍛えてくれたんでね」

「あら、やっぱリクルヴィさんが何かしたんですのね。インストラクターの方はご存じありませんけど、今のあなたをみるにそれなりに優秀なようですわね」

「それだけじゃないさ」

「?」

「俺は千冬姉えの弟だからな、姉の名誉を俺が汚す訳にはいかないんだよ!」

「……………どうやら見誤っていたようですわ。あなたは紳士じゃなくて騎士の方がお似合いですよ!」

俺の宣誓を聞いたセシリアは、ニヤリと笑いながら再びライフルを構えた。

それに応えこちらにもニヤリと笑い返しながら中段にブレードを構える。

素人が代表候補生に喰い付くという、緊迫した予想外の展開にアリーナの歓声は大きく沸いた。

だけど俺は余計な音を意識から外し、ただ目の先にいるセシリアへと集中していく。初めて話した時とは違う。男と見下し驕っていた時の眼ではない、同格の相手として認めた微塵の油断のない強者の眼。

これがセシリアの本気か。

冷や汗が止まらない、俺は彼女の射撃を掻い潜って近づけるのか？

いや、近づくのだ。千冬姉えの名誉のためだけではない、セシリアの期待や協力してくれた筈とクルヴィに報いるためにも、なんとしても近づいて斬る！

「ここからは手加減なしですわよ!!」

「上等っ!!」

膠着した戦場は、互いの意地をかけて終幕へと近づいていた。

★

「はあくすごいですな織斑くん、あれで起動が2回目とは思えません」

「当然だ、何せ私の弟だからな」

「織斑くんを信頼されてるんですね」

「知っているんだよ、あいつが今浮かれていることもな」

確かにそんな感じの色がちらほらと・・・、織斑先生は一夏さんのことを良く観てるんだなあ。

やっぱり家族だからかな？

さつきの一夏さんの言葉も、隠しきれないくらいすぐ嬉しいみたいだったし。

「エレフセリア、一応言っておくが私は家族の事だからかわれるのが嫌いだ」

「ツ!!」ビクウツ!

織斑先生並みの達人になると、心を読むのはデイフォルト装備なんだろうか？

研究所を出た時に感じた世界の広さを改めて思い知らされた。

「クルルルは喋れない分顔に出やすいから」

「まあ・・・確かにそうだな」

「ツ!!」ガーン!

本音さんと箒さんからもそんな評価だった。

・・・想いを伝えるのに必死になつてから解らなかつたけど、隠したいこともバレルくらい表情に出るって不味い気がする。

これは直した方がいいんだろうか……。

「そこがクルルルの可愛いところだよ」

「そうだぞ、それに悪いことでもないしな」

「……ツ」ジーン

面白がってる色が透けてる本音さんはともかく、真剣な色で受け答えてくれた箒さんの言葉に感動した。

うん、そんなに無理矢理変わらなくてもいいかもしれない。

「それにしても……一夏め、中々やるじゃないか」

「そうだね～ISに乗る前と今じゃ別人だよ」

「……ツ」コクコクツ

模擬戦前の一夏さんは落ち着きはしていたものの、未だISに乗るということに関して現実味を感じていないようだった。

しかし到着したISに触れた途端、塗り替わったように彼の色が輝いた。

こちらに『行ってくる』と言った時の声と表情はとても凛々しくなっていた。

専用機持ち同士の試合の情報収集のために目の洗脳は解かれていたので、私はその姿をモロに凝視し惚けしまい機能停止。

本音さんと箒さんに話しかけられるまで彼の出て行ったピットの入り口を眺めて顔

を赤くしていたそうだ。

ううう・・・黒歴史だ・・・。

それはさておき、現在の一夏さんの動きは時間が経つ毎にどんどん良くなって行く。

山田先生が言っていたように、起動が2回目とは思えない。

・・・織斑先生の発言も正しく、若干ハイになつてゐるみたいだが。

「わあ〜BT装備を2機も瞬殺しちゃつた〜！おりむーさつすが〜！」

「ふん、私が鍛えたのだから当然だ」

「・・・ツ」タラ〜ツ

ああ・・・一夏さんの色、どんどん油断が濃くなつていく・・・。

だ、大丈夫かな？逆にセシリアさんは火薬（おもわく）の匂いがするし・・・。

心配しても観てることしかできないわけだけど、やつぱり視えてると状況が違つた情

報と一緒に解つちやうからドキドキするなあ。

「・・・ツ・・・ツ」ドキドキ

「クルルルはやつぱり心配〜？」

「・・・ツ・・・ツ！」コクコクツ

「素直で可愛いなあクルルルは〜！」むぎゆ〜

「ツ!？」

本音さんが抱きついてきた。

時々脈絡なくそれらしき兆候を匂わせずに抱きついてくるので非常に驚く。

ふと視線を感じてそつちを向くと、慌てて箒さんが目を逸らしたのが見えた。

同時に、顔を少し赤くして俯き、柑橘類（こんわく）の香りを漂わせているのが視えた。

「・・・やはり素直にならなければダメなのか」ボソツ

「しののんなんか言つた〜？」

「な、何でもない！」

「むふふ〜素直じゃないしののんも可愛い〜！」むぎゆ〜

「こ、こら！やめないか！ちよ、どっこ触つてえ——あんっ!？」

必死に誤魔化す姿がツボに入ったのか、本音さんは私から離れて今度は箒さんに飛び付いた。

その時ちよつと描写に困るところをくすぐる様にソフトタッチすると、箒さんが甲高い嬌声がピツトの中に響いた。

わ、わあ・・・！わあ・・・！箒さんの大きいのがあんなにぐにゅぐにゅつてなつて

る・・・！

「しののんのつてすごいおつきいね〜」

「だ、だからやめろ！ やっ!? これ以上は本気で怒るぞ!」

「よいではないか、よいではないか!」

「……ッ!……ッ!」 ドキドキッ

わあ……すごいなあ……大きいなあ……気持ちよさそうだなあ……!

あ、気が逸れてる内に模擬戦の方に動きがあったようだ。

いつのまにか一夏さんの白式が一次移行（ファーストシフト）が終わってその姿が変化していた。

加えて手に持った太刀から光のツルギが伸びている。

あれって……もしかして零落白夜ですか!?

確か織斑先生の愛機である暮桜の単一仕様（ワン・オフ）能力（アビリティ）だったはずだが……。

姉と弟とはいえ、同じ能力が発動することなどあるのだろうか?

こことは違う前世の記憶があるとはいえ、「原作」と呼べる知識に関して私の有している記憶はかなり曖昧だった。

むう……役に立ちそうなものは全然覚えてない。記憶しているのは精々今思い出した事と一夏さんのことくらいだ。

まあ……覚えてないなら仕方ない。知っていたとしてもできることがあるかも解ら

ないしね。

そう考えを締めて再び画面を見上げようとした時、後ろから誰かの手が私の胸を鷲掴んだ。

「ツ!!?」

「おおくろルルも中々・・・!」

ほ、本音さん!?

ひゃあつ!?そ、そこは・・・!?

このままではまずいと先程戯れていた箒さんの行方を捜すと、胸を腕で抱えながら床に座ってすすり泣いていた。

なるほど、私も箒さんと同じ運命を辿るらしい。

自らの身体を他人に弄ばれるという恐怖に耐えながら、私はせめて優しくしてくれるように本音さんに目で懇願した。

「うわあ・・・!そ、そんな目で見られたらゾクゾクしちゃうよ〜!」

「~~~~~ツ!!!」

あ、あう、ひゃうう、だ、だめええええええええええええええええええええええええ!!!

「・・・千冬姉え、一体何があつたんだ?」

「・・・知らん。あと織斑先生と呼べ」

「み、みなさん・・・若いですね・・・。ううう、学生時代のトラウマを思い出しそうです・・・」

私達を救ったのは、織斑先生の出席簿による教育的指導だった

世は無情くアジサイく

「・・・ツ・・・ツ」カタカタカタカタツ

模擬戦の結果は一夏さんのエネルギー切れによる敗北で終わった。

しかしセシリアさんがその結果を不服として、クラス代表者から辞退することは一夏さんの不戦勝となり、結局は一夏さんがクラス代表者の座に納まることになった。

問題はそれからだ。

翌日、クラスに入ってから来た一夏さんに近づいたセシリアさんは、今までの発言に対する謝罪と改めて友人としての握手を求めた。

一夏さんはそれを快く承諾し、自らの失言を謝罪した上でその手を握った。

その時、セシリアさんが私と篤さんに意味あり気な流し目を送った後、再び一夏さんに満面の笑みを浮かべながら一言。

『これから未長く（・・・）お付き合ひしていききたいですわ』

これは・・・挑戦だ・・・。セシリアさんからの一夏さんを巡る乙女の戦への挑戦だと、私は受け取った。

そう、あの時一夏さんを見ていたセシリアさんからは溢れだしていた色。

私や箒さんと同じ恋の色だった。

それから一夏さんの訓練に積極的に参加するようになったセシリアさんは、模擬戦中に説明を入れたりしながら着実に一夏さんとの距離を縮めて行った。

箒さんも負けておらず、同室というアドバンテージを有効利用する為に必死に勉強して一夏さんの知識面をフォロワーするようになった。

しかし、私に関しては大きく後れを取るようになる。

「……ッ……ッ……」カタカタカタカタカタカタッ！

注釈入れようにも一夏さんは手話が解らないので、訓練にしろ勉強にしろ情報の伝達にどうしても時間がかかってしまう。

仕方ないことではあるのだが、その差がこうして如実に現れると焦らずにはいられない。

そこで私は思い付いた。

私が声を出せないなら別のもので声を代用すればよいのではないか？

さつそく私はネットを漁った。

システム構築などの知識はIS訓練の際に研究所で教わっていたのだが、今回は質より早さが重要なので贅沢は言わない。

「……ッ……」カタカタッ！

色々試してみたけど、簡単だしISの機能として保存しておいた方が便利そうだな。

抑揚がおかしい部分もあるけど、そこは聞き慣れると逆にツボになりそうな声だった。

流石は二〇二〇の実況動画でよく使われるだけの事はある。

どんな場面もこの声で喋るだけであつという間にコメデイになつてしまふ。

「クルルー……?日曜の朝から何やってるの〜?」

「ツー!」

そうだ、一夏さん達の訓練に参加する前に本音さんで試してみるとしよう。

文章は…….こんなものだろうか。

『本音さん、おはようございます。今日は昼食も作って置きましたから、ゆっくりして
いってね!』

「え?クルルーが喋つた?え、ええ〜?あれえ〜?」

よし、うまく行つたようだ。

これで一夏さんや他の人達とのコミュニケーションも簡単になる。

さつそく一夏さん達と合流しなければ!

『それでは、私は一夏さん達と訓練してきます』

「う、うん、いってらっしゃい……」

部屋を出る時本音さんが呆けた顔でこちらを見ていたが、意志の伝達には問題なさそうだったので、私は頭を下げてから一夏さん達の元へ向かった。



クラス代表者を決める模擬戦からあつという間に週末になったものの、次に迫るクラス代表戦に向けて休日であつても訓練と勉強の束縛は重く押し掛かってくるのだった。

身体を鍛える為に箒と共に朝から軽く運動し、アリーナの方ではセシリアと模擬戦を繰り返しながら基礎的な練習、そして労いにクルヴィが作った昼食をみんなで食べる予定らしい。

まあ、強くなるためには日々の鍛錬が必要な訳だし、何よりクルヴィの料理つてのも気になる。

ちよつと挫けそうになる精神を叩き上げ、地面に倒れた状態から再び立ち上がる。

「よし、もう一回だ！」

「一夏さん、そろそろ補給しないとエネルギーが切れますわ。ここら辺で一度休憩しましょう」

「え？お、おう・・・解った・・・」

言われて確認してみると、確かにエネルギーゲージが真っ赤になっていた。

ものっそい出鼻を挫かれた感じがやる気を削ぎ、その為か今までの疲れがどっと出て身体が重くなった気がした。

『どうぞ、タオルとドリリンクです』

「ああ、ありがとう・・・?」

エネルギーを補充のためにピットに戻って白式を待機状態に戻すと、目の前にタオルとドリリンクが手渡された。

何の疑問もなくそれらを受け取るが、そういえばさっきの聞き覚えのない声は誰なのかという考えに行き着く。

慌てて汗を拭っていたタオルを顔からとって確認すると、そこに居たのは大きなバスケットを持ったクルヴィだった。

「あれ?今の声ってクルヴィか?」

『そうです。ネットにあったフリーの合成音声ソフトをダウンロードしました』

「へえーそんなのがあるのか」

『はい、これで皆さんともお喋りできますね!贅沢言えば、この抑揚はどうかにならないかと思いますが』

「まあ、確かに違和感あるけど、聞き慣れたらそうでもないんじゃないか?」

『そうでしょうか？それなら箒さんたちともお話してみましよう！』

「ああ、多分向こうのピットにいると思うぞ。箒は今から部活だつてさ」

『解りました、ありがとうございます！』

そう言つてクルヴィイはピットの入り口へと去つて行つた。

エネルギーを補給しながらその後ろ姿を眺めていた俺は、しばらくした後喉につつかえていた言葉をポツリと呟いた。

「なんつーか．．．なんでそれを選んだ？つて感じかなあ．．．」

クルヴィイの健気さと天然な不憫さに、なんとなくやるせない気分になつて天井を仰ぐのだった。



『セシリアさん！セシリアさん！』

「え？誰ですの？」

『私です！クルヴィイ・エレフセリアです！』

「く、クルヴィイさん？．．．その声は一体どうしたんですの？」

『ネットにあつた合成音声ソフトをダウンロードしたんです！その．．．皆さんとお話し

たくて……』

「くう……!何故ですの……!こんなにも可愛いのに……何かが残念ですわ……!!」

『うぬぬ……セシリアさんにも不評ですか』

「え?私以外にも誰かに聞かせたんですか?」

『ええ、一夏さんに……ってあれ?おかしい、なんで考えたことまで音声に出てるの?』

「……もしかして、そのソフトISにダウンロードしたんですの?」

『は、はい……色々便利そうだと思って……』

「つまりそれが原因ですわね……」

『えっ?あつ、も、もしかして……!』

「ダウンロードしたソフトを、ISが使いやすいように設定し直したんですわ!」

『な、なんだってえ……!?!』

「多分そのソフトもクルヴィさん用に最適化(フィッティング)したんだと思いますわ」

『な、なんてことでしょう……これでは一夏さんの前で下手なこと考えられませんよ……!』

「そういえばこの前一夏さんとキスしたらいいですけど、その話本当ですか?」

『柔らかくて気持ち良かったです……ぬわー！? やめてえええええええええええ!!』

「ホホホホホ、そうですね……本当でしたのね……」

『ここ、怖いですよセシリアさん! 何故銃口をこっちに!?』

「クルヴィさん、体調を崩されて模擬戦が流れてしまいましたから、ここで一つその持ち越し戦と行きましようか?」

『ウ、ウソダドンドコドーン!!』



結局ISスーツに着替えさせられた私は、セシリアさんと一夏さんの補給を待つて二人との模擬戦に参加することになりました。

訓練以外で戦闘経験無しのが、2人相手にこの先生が残れるのか!?

それにしても、まさかあのソフトをISが取り込んでしまうとは予想外でした……。

私のことを考えてくれた結果なのでしょう? そうなら嬉しいつちや嬉しいんですけど……。

後で早急にプログラムを書き換えておく必要がありますね。

『はぁ・・・書きかえる前に一夏さんにバレなければいいんですけど・・・』

「何がバレるんだ？」

『何でもありません』

無心・・・無心だ・・・目的以外のことは何も考えるな・・・。

私の目的は一夏さんとセシリアさんの専用機を模擬戦によって情報収集すること・・・それ以外は余計なんです・・・だから考えるな・・・。

『もしバレたら・・・その時は襲うしかない』

「・・・純情な割に意外と大胆ですわね」

『だから早く終わらせましょう！今日はもう部屋に戻りたいんです！』

「ええ、流石に可哀想ですから、私が一夏さんのどちらかと戦ってくださいればよろしいですわ」

『・・・いえ、2人同時でお願いします』

「え？」

「あら・・・言ってくれますわね」

短時間で情報をできるだけ集めて置きたいというのもあるが、私の専用機は多対一の方が得意だ。

情報処理と武装に容量割きすぎて、その他の性能が低いから本当は戦闘向きじゃない

んだけどね。

それでも立ち回り次第で結構やれるんじゃないだろうか、そう思ったからこそその発言だ。

それぞれ2人は既にISを展開しているため、私も開いた目を閉じ、起動のためのイメージを思い起こす。

私の起動イメージは、空に拡散していく花火のような光だ。

『拓いて、可能性の巫女（ミリヤ・メデイウム）』

それと同時に私のISが展開され、網膜ディスプレイにパラメータなどの表示が浮かぶ。

「へえーそれがクルヴィの専用機か、なんか全体的に俺達の機体よりちっちゃいな」

「そうですね。腰の花びらのような武装は、あの時音楽を奏でていたものですね?」

『そうですね。本当は盾に使うんですけど、近接武装用に常に振動してるので、軽く触れると反響して音が出るんです』

「そういう仕組みだったんですか、それにしても見事な演奏でしたわ」

『これに気付いた時から、合間合間にちよつと練習してたんです。変な趣味だと思ってましたけど、お眼鏡にかなって光栄です』

まさかこの特技があんなどころで活きようとは思わなかった。

本来の活用法とは大分違うしね。

しばらく私のISを観察していた2人は、やがて大体のあたりを付けたのか試合開始のため距離をとった。

「それでは始めましょうか？わたくしと一夏さんというベストパートナーを相手にして、どれほど持つか見せてくださいまし！」

「えっと、やるからには手加減しねえぞ！」

『はい！頑張ります！』

どこまでやれるか、自分の力を見極めるにはいい機会だと思つて頑張ろう。



開幕早々、クルヴィさんは何かを広範囲に射出した後、腰部の花びらのような武装を展開し自らの周りに待機させた。

多目的汎用型シールドBT武装・獅指（ダクティラ）、わたくしのブルー・ティアーズと同じ第3世代の特殊武装。

開発会社が我が国のIS・システムズ社だというのは前に伺つてましたけど、同じタイプの機体で挑まれるとなると改めて対抗心が沸きますわね。

ダクテイラはクルヴィさんを覆い隠すように規則的に動き回りながら、こちらからの一切の攻撃の隙を見せない。

これでは遠距離からの狙撃は無理ですわね。

「一夏さん！あの花びらを撃墜しないと射角を取れませんわ！」

「任せろ！」

まずは一夏さんがダクテイラを破壊し、同時に私もブルー・ティアーズで死角からの援護射撃が定石ですわ。

先程のお話から推測するに近接武装用の加工も施されているようですけど、一夏さんの零落白夜なら問題ないですわね。

このままクルヴィさんが大人しくしていれば、の話ですが。

『させません！』

ダクテイラの上下左右から飛び出してきたように見えた何かが、かなりの速度で一夏さんの方へ向かっていく。

やはり来た！だけどころくらいなら予想済みですわ！

「それはこちらのも同じですよ！」

ハイパーセンサーで強化した視力を元に、飛来する物体の未来位置を予測して正確に撃ち抜く。

あの動き・・・もしかしてアレもBT兵器ですか？

スコープから視線を外して、一夏さんの支援のためにブルー・ティアーズを展開させながら今の武装についての予測を建てる。

予測していたから撃ち落とせたとはいえ、かなりの速度と狙い辛い小さなサイズ、油断はできないがあの程度の数なら撃ち落とせば脅威にはならない。

数瞬でそう結論を出す、一夏さんへ警戒と共に作戦続行の指示を出す。

「一夏さん！邪魔なものは私が落としますけど、クルヴィさんはまだ何か隠してますわよ！」

「解った！頼むぞセシリア！」

「あつ・・・ま、任せてくださいいな！」

ああ・・・キリツとした表情でわたくしに「頼む」だなんて・・・。

い、いやですわ・・・今の音声ちゃんとログに残ってるかしら・・・？

「ちよつ、セシリア!?どうしたんだ!？」

「ハッ!い、いけませんわ、わたくしとしたことが」

一夏さんへの雑念を振り払い、一夏さんの方へ視線を戻した。

「・・・はい?」

一瞬、状況を理解できずに思わず呆けてしまう。

一夏さんを追っているのは先程撃墜した武装なのは解る、おかしいのはその数だ。最初の攻撃の時の5倍・・いやまだ増え続けているので正確な数は解らないが、とにかく大量のB T兵器が一夏さんを執拗に追いまわしていた。

画面に情報が映し出されたのですぐに確認してみる。

強襲用群體杭型B T武装・執磔（エモニ）。

数による連続的な追突ダメージを打ち込むことで、対象に浸透性の衝撃を与える事が可能な近接格闘用B T兵器。

しかしあのサイズからしてそれほど強力なダメージにはならないだろう。

一つ一つが重なって黒い霧のように見える程の数で襲ってこなければ。

「うおおおおおおおおお!!?これ死ぬだろおおおおお!!?」
「?!」

「ちよっ、一夏さん!?!そのままこっちに来ないでくれます!?!」

混乱して周囲を確認していなかったのか、一夏さんが物凄い数の黒い濁流となったエモニを引きつけてこちらに向かってきた。

こうなったら支援どころではない、慌ててブルー・ティアーズを呼び戻し全力で一夏さんとは別方向に逃げようとする。

しかし中途半端に視界に入ってしまったのがいけなかったのか、一夏さんは再びこち

にじわじわと逃げ場をなくしていくのだ。

本体であるクルヴィーさんに攻撃しようにも、周囲に展開されたダクテイラがそれを許さない。

あの標準よりも小柄で貧弱そうな機体の相貌は、おそらく武装の制御するために情報処理能力を上げ、極限まで他の要素を削った結果なのだろう。

じわじわと縮まっていく包囲が、撃墜までの僅かな猶予だった。

せめて少しでも多くのエモニを道連れにしようというライフルを構えようとするわたくしに、一夏さんが背中を向けながら通信を入れてきた。

「セシリア、賭けに乗って見ないか？」

「賭け、ですの？」

「ああ、一か八か、包囲を突破してクルヴィーを仕留める」

その声は凜としていて、こんな状況にも関わらず胸が強く締め付けられる。

自分が惚れた男は、こんな状況でも真っ直ぐに勝利を見つめることができるのだと、その強さを改めて惚れ直した。

ならばこれ以上情けない顔を見せられない、オルコット家の淑女としてこの急場も華麗に脱して魅せよう。

「……どうするつもりなのか教えていただけるかしら？」

「乗ってくれるのか？」

「愚問ですわ、私の誰だと思いで？イギリスの国家代表候補生、セシリア・オルコット
でしてよ？」

「・・・そうだったな、ならお前の全てを俺に預けてくれ!!」

「はい!・・・」
えっ?」

「じゃあまずは・・・おい、セシリア聞ってるか？」

「あ、え、ええ!ももももちろんですわ!」

「そうか?最初はだな・・・」

も、もしかして、今のつてぶ、プロポーズですか?

い、いやまさか、でもあの言い方は確かに・・・いやいやいやいや!

い、いけませんわ、一夏さんの作戦概要は何とか頭に入ってますけど、先程の発言が
気になって仕方ないですわ!

これは後できつちり問いただすべきですわね。

・・・うふふ。



『……なんかまずい事態が起きてる気がする』

エモニの群体に囲まれた一夏さん達の方を見ながら、どこからか電波を受け取りそんなことを呟く。

その嫌な予感を確認するため、最初に展開した全ての“私”からの観測情報を視る。感覚同調観測機（ヌス・ヴレポ）に同調し同感覚を持った複数の“私”が、様々な角度から注意深く一夏さん達の動きを知覚する。

火薬（おもわく）の匂いに決意の炎……何か仕掛けてくるのか？

攻撃の意志は真っ直ぐ私に向いているようだが……。

ドグオオオオオンツツ!!!

そのままで観測した時、特大の爆発がエモニの包囲に穴を開けた。

『ツ!?!』

まだ納まらぬ爆炎の中から何かが飛び出してきた。

この色は彼だ、こんな無茶な方法で特攻を仕掛けてくるなんて……!

まずい、早くエモニを戻さないと……!

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!!」

『くうっ!?!』

真つ直ぐに突っ込んでくる一夏さんの正面に、8枚すべてのダクティラを重ねて大きな花のような形の盾にする。

同時にヌス・ヴレポとの同調を切ってすぐさま横に全力移動した。

「ちええええええええええすとのおおおおおおおお!!」

多種に渡って強力な盾となるダクティラを、零落白夜を発動した一夏さんの雪片式型が一気に両断した。

なんて出鱈目な威力・・・!

「ただ先読みした私より一手遅い! エモニは既に一夏さんの避けられない距離に戻している!」

しかし私は視た、いや視えた(・・・)。

一夏さんの動作から聞こえた(・・・)言葉。

『かかったぞセシリア・・・!!』

次の瞬間、特大のレーザーが胴体に突き刺さった。

2度、3度と繰り返し撃ち抜かれると、全てのシールドエネルギーを削り取られる。

射撃位置をみると、僅かにできたエモニの包囲の隙間から、ライフルでこちらを狙う

セシリアさんが見えた。

なるほど、見事に嵌められた。

『私の、完敗です』

絶対防御が発動して地面に落下する私を、一夏さんがお姫様だつこで優しく受け止めてくれた。

『どうだ、勝ったぜ?』

『はい、負けちゃいました』

子供っぽい笑顔でこちらを見つめる一夏さんに、私はちよつとドキドキしながらそう返した。

上空からセシリアさんが何やら叫びつつ急接近してくる。

短い間だが、セシリアさんに止められるまで彼の色と体温を感じる事としよう。

『いい匂いです・・・』

『そうか? 汗臭いと思うけど・・・』

『えっ?』

あれ?もしかして、また考えてたことが勝手に音声に出てた?

・・・・・・・・・・・・・・・・わ、わあ! わああああああああああああああ

あ!!?

『離してください! 離してください!』

「うおっ!? 急に暴れるとあぶねえって!」

「夏さん！私にあんなことを言っておきながらどういうことですか!?!」

最近良くオチに使われてる気がするが、この騒ぎの収拾は一つの名状しがたき出席簿のようなモノによって成されたのだった。

燃えよ愛くミズタガラシく 1

あいつに恋したのは、ほんと何気ないことだ。

アホな男子が鳳鈴音という私の名前を馬鹿してきたのが悔しくて、その場で思いつき引つ叩いてやったのだ。

すると放課後、数人の男子を引きつれてお返しとやらに気持ち悪い顔でやってきた。今考えたら、そんな小物にムキになってしまったのが私の失態だったのだろう。

寄つて集つて女の子一人を囲んで良い気になっているそいつらを、どう張り倒してやろうかと強がっていたが、小学生の頃とは違い思春期に入つた男子との力の差は歴然だった。

引つ叩いた手を掴まれて、数人がかりで壁に抑えつけられた時、いつも喧嘩しても負かしていた男子という存在が初めて怖くなった。

必死に拘束から抜け出そうとして暴れると、今度は自慢の髪を強く引つ張られた。

痛みと恐怖で泣きそうになつたけど、負けたくなくて髪を掴んでいる男子を睨みつけてやった。

それが気に入らなかつたのか、見下げたことに男子は仲間にスカートを脱がすように

指示したのだ。

興奮した様子でニヤニヤと笑いながら、男子の一人がスカートに手を伸ばしてくるのを私は髪を引き剥がすのに必死で抵抗できなかつた。

悔しかった、こんな奴等に好きにさせている弱さが。

怖かった、そんなに変わらないと思っていた男子の暴力が。

そんな時、あいつが来たのだ。

後から聞くとあいつの他にも弾が一緒に居たらしいけど、私には颯爽と髪を掴んでいた男子を殴り飛ばしたあいつしか目に入らなかつた。

派手に取っ組みあつて男子達を追っ払うと、気の抜けて座り込んでいた私にあいつは手を差し伸べた。

だけど私は男子に助けられたことを素直に受け取れなくて、羞恥に顔を赤くしてその場から逃げ去つた。

翌日、あいつがクラスメイトであることを知った私は、助けくれたお礼に自分家の中華料理店で御馳走しようと思つてあいつを誘つた。

それから毎日あいつや弾と話したり遊びに出かけたりするようになって、しばらくする頃にはあいつへの想いが好意に変わつていた。

そんな朝ドラみたいな展開だと自分でも笑つてしまうほど、よくあるつまらない恋

だった。

ただ私は、日本に居るあいつへ会いにいく為に必死に代表候補生の座を勝ち取ってしまうくらいには、あいつの事が好きだった。

もうすぐだ、もうすぐあいつに会える。

一年も経つたのだ、それはもう私が居なかったことを寂しがっているに違いない。

そう思っていたのだ、が。

転校の手続きのために受付を探していた時、たまたまあいつを見かけたのだ。

楽しそうに数人の女子と共におしゃべりしながら連れ添っているところを。

気にくわなかった、そりやあもうその場で地団太踏んでしまうくらい気にくわなかった。

中学の時からそういう奴だと解ってはいたが、理解と納得は別なのだ。

あの久しぶりに会った天然ジゴロに劇的な再会を求めるだけ無駄なのだ。

ならばこちらから行くしかない。

盛大に驚かせて、私に気が向いてる内に一気にアドバンテージを取り返すのだ。

幸い、別れの際の仄かな期待を込めた約束という武器もある。

他の女には邪魔させない、あいつの隣は私のものなのだ。

何故なら私は鳳鈴音なのだからして。

「むうあつてなさいよ！一夏あああああつ！！」

気合いを込めた一声を放ち、まずは力強く受付を探して再び歩きまわるのだった。

★

『織斑くん！クラス代表就任おめでとー！ー！ー！ー！ー！！』

織斑一夏クラス代表就任パーティーと書かれた張り紙、色々装飾された学食の間、そしてお菓子や飲み物などの並べられた机。

みんなで賑やかに騒ぐというパーティーと言われて意気揚々と参加した私も、手渡されたクラツカーの紐を引っ張って一夏さんを盛大にお祝する。

おお・・・！なんだかクラツカーを引っ張るのって爽快感がある気がする・・・！！
でも皆さん、何故私に向けて鳴らしたんですか？

お蔭ですっかり紐やら紙吹雪だらけなんですけど！髪が長いから取るの大変じゃないですか！

「……………」プスッ

「あはは、ごめんねクルヴィさん。今とつてあげるから！」

「あ、私も私も！」

「ちよつと、それは私の役目よ！」

「・・・ツ!?・・・ツ!?」 オタオタツ

何故か皆さん私に群がって紙吹雪を取るついでに、何やら髪を撫でたりし始めた。わ、わあ! な、なにごとですか!?

抗議しようにも、合成音声ソフトの方はIS展開時にしか使えないように設定してしまつた。

まだ時々考えたことが勝手に入力されたりするのでシステムを見直ししている途中なのだ。

「すごい、枝毛が一本もないわ。どんなシャンプー使ってるのかしら?」

「いい匂いだわ・・・香水じゃないわよね?」

「さらさらしてて手触りもいいし、いつまでも触っていたーい!」

「・・・ツ!?・・・ツ!?」 ビクビクツ

あわわわわわ、全方位から囲まれて髪を触られています・・・!

どうしてこうなつたんですか!? 私聞いてないですよ!

「ほらほら皆さん! そう無遠慮に人様の髪を弄るものではありませんわ、クルヴィさんも怖がつてますわよ!」

「・・・ツ!?・・・ツ!?」 ビクビクツ

セシリアさんの鶴の一声によって、皆さん潮が引くようにそれぞれ謝罪を口にしながら離れて行き、ようやく緊張から解放され溜息をついた。

た、助かった……！ありがとうございます、セシリアさん！

「……ッ！」ペコペコッ

「いいんですのよクルヴィさん。あ、それで折り入ってお願いがあるのですが……」

「……ッ？」

「あ、あとで櫛で梳かせて貰ってもよろしいでしょうか……？」

ブルータス……！あなたもか！

確かに人一倍手入れには気を使っていますけど、まさかこんなに注目されていたとは……！

皆さんの魔の手から逃れる為に、私は頭を抱えて壁の方を向きながらしやがみこんだ。

「……ッ！……ッ！」プルプルッ

「ぐはっ!？」

「ああ！しっかりして磯部さん!？」

「なんて威力かしら、もしこれを天然でやっているとしたら……クルヴィさん！恐ろしい子っ!？」

「ハア・・・ハア・・・何この可愛い生物、部屋に持つて帰りたいたい・・・!」

あれ?さらに危機的状況になつてゐるような気が・・・?

なんだか妖しい匂いが漂つてきて私の共感覚が警鈴を鳴らすのだ。

そんな時救いの主として現れたのは、やはり一夏さんだつた。

「確かにクルヴィの髪つて綺麗だけど、そんなに気にするもんなのか?」

『当たり前だ!!』

「ひいつ!」

一夏さんの発言を聞いた皆さんは乙女の真言を一斉唱和。

そして口々に自らの想いの猛りを私の髪を親の敵の如く睨みつけながら叫ぶ。

「女にとって髪は命も同然なのよ!輝く生命の証なのよ!」

「風にたなびきそうな細くてさらさらする髪!しかも手入れが面倒な長髪でありながら

枝毛のない艶々な状態!」

「化粧品と同じくらいリンスにもお金かけてるのに嫉妬すら抱けずに負けを認めざる得

ないわ・・・!」

「しかもくせ毛ですらないですつて・・・!?!あなたはどれだけ髪に命を賭けてるつていう

の・・・!?!」

そこには女の子としての魂の叫びと深い慟哭があつた。

しかし私にはどうすることもできない問題なので、ただただ皆さんの視線に戸惑うしかない。

「……研究所から送られてくるサンプルには何が入ってるんだろう。他にも色々日用品とかが装備と一緒に送られてきたりするけど、ちよつと調べてみた方がいいだろうか？」

とにかく、なんとか皆さんの注意は失言の元である一夏さんに向いてるので、このままパーティーの主旨を思い出させて意識を誘導しよう。

そろそろと皆さんの飲み干されて空になったコップに新しいジュースを注いでいく。

「……ッ！」トプトプトプッ

「あら、ありがとう」

「……ッ!……」ペコッ……」コテッ?

あれ、この眼鏡をかけた人ってクラスメイトだったでしょうか?

クラスの人とはみんな知人にはなれたと思ってたんですけど……?

あ、このリボンの色は2年生だ。なんで2年生がここに?

首を傾げて考えていると、その人がいきなりカメラで私を撮ったのが音で視えた。

「……ッ!?!」ビクッ

「あらら、いきなりたいちゃってごめんね?あなたがあんまり可愛いものだから、ね?」

「……ッ」フルフル

「あはは、ありがと！とところであなた、クルヴィ・エレフセリアさんよね？織斑一夏くんとは仲良いの？できれば紹介してほしいんだけど」

一夏さんに紹介ですか……そういえば時々箒さん達が訓練のお誘いに来た人を追い払ったりしていたのを見たことありますけど、この人もそんな感じなんでしょうか？でもカメラを持つてるし……新聞部か何かだろうか？

まあ、とりあえず変なことを書かなければ紹介してもいいだろう。

「……ッ」コクッ

「ありがとう、じゃあよろしくねクルヴィさん！」

「……ッ!」ビクッ

な、なんだろう……。この人からあまり関わりたくない類いの好感を持たれた気がする……！

こういう時の直感ってほぼ確実に当たるから、今度から気をつけるようにしよう。

「あ、さつき撮った写真、今度の学園新聞の記事に使わせて貰うから！」

「ッ!」

既に手遅れだったようだ。

自力で一夏さんを見つけたのか、案内の途中で固まってしまった私を置いて行ってし

まった新聞部の先輩。

写真の記事掲載をやめるように抗議する為に、私は慌てて先輩の後を追う。

先輩は一夏さんに取材の交渉に入っているとところだった。

「私新聞部部長の薫 薫子っていうの、よろしくねー！さっそくだけど、男性IS操縦者の織斑くんと期待の専用機持ちのセシリアちゃんにツーショットで写真撮りたいんだ。いいかな？」

「えつと・・・まあ、解りました」

「つ、ツーショット・・・！もちろんですわ！・・・ところで、出来上がった写真は頂けませんわよね？」

「もちろんだよ！期待しててね？」

あっさり取材をOKする2人に私は益々焦りを募らせる。

そうだった・・・！一夏さんは最近まで嫌というほど取材されてただろうし、セシリアさんは広告のモデルとして雑誌のお仕事もあつたりするから警戒心が薄いのか・・・！私の写真と共にどんな記事になるかは解らないが、直感が碌なことにならないと言っている・・・！

なんとしてもせめてさっきの写真じゃなくて一夏さんと一緒に写ってるほうで掲載するように交渉しなくては・・・！！

「・・・ツ!!」ガシィツ!

「あら、クルヴィちゃんも一緒に写りたい? 私としては単体の方が可愛い記事に仕上がると思うんだけど?」

「・・・ツ!・・・ツ!」ブンブンツ!

「おーけーおーけー、それじゃあセシリアちゃんの反対側でよろしくね」

なんとか私の単体写真掲載は阻止できたようだ。

ふうつと一息ついてから、いそいそとセシリアさんとは逆の位置に寄り添う。

まだ一夏さんの色を近くで見ると少しドキドキした。

でもセシリアさんと箒さんにはちよつと悪いことしちゃったかな?

二律背反気味な感情に複雑な気分になりつつも、私はカメラの方を向いて笑みを作った。

・・・それにしても、皆さん隙あらば写真に写る気満々ですね。物凄く決意の紅が燃えてるんですが。

「はいはい、じゃあにつこり笑ってー! 織斑くんちよつと固いよー、うんそんな感じでおっけー! それじゃあ撮るよー! タイの首都の正式名称はー?」

「えつと、バンコク?」

「残念、正解はクルンテープマハーナコーンアモーンラッタナコーシンマヒンタラー

ユツタヤーマハーディロックポップノツパラットラーチャターニーブリーロムウドム
ラーチャニウエートマハーサターンアモーンピマーンアワターンサティツトサツカ
タツティヤウイツサヌカムプラシットでしたー！」

そういつてシャツターをたくと同時に、カメラの枠一杯にクラスの皆さんがどこから
ともなく写り込む。

しゅ、瞬間移動ですか・・・最近の女子高生は凄いですね・・・あ、私もか。

「何故いつの間に全員入り込んでますの!？」

「まま、セシリア達だけ抜け駆けはするいじゃん！」

「そうそう、私達も織斑くんと一緒に写った写真欲しいしね！」

女子高生のアグレッシブな行動力に、一夏さんは苦笑いしているようだった。

そのまま予約した時間まで皆さんと楽しく騒いだ後、その日は心地良い疲れと共に眠
ることができたのだった。

・・・翌日、配布された学園新聞には、何故か一夏さんとは別の特集で私のしや
がみこんでいる写真などが使われており、髪がとても触り心地が良いことまでもが紹
介されていた。

その性で最近は、噂を聞きつけた女生徒たちが私の髪を虎視眈々と狙い始めたのだつ
た。

やったね私！またお友達が増えたよ！

..... やっぱり釈然としなかった。



今朝は珍しくのほほんさんがクルヴィを伴わずに話しかけてきた。

なんでもお弁当を作っていて遅れているのだとか。

へえ、クルヴィって自炊できたんだなーと思いつながら、のほほんさんから振つてきた話題を楽しみながら受け答えしていくと、もうすぐ始まるクラス対抗戦についての話題になった。

「もうすぐクラス対抗戦ですが。おりむー選手、自信のほどは？」

「おう、恥かかないように頑張るぜ！クラスのメンツもあるしな」

「強気の発言ですねー！しかし2組のクラス代表が転校生と入れ替わったそうですねー？」

「転校生？この時期に珍しいな、編入か？」

「そうらしいですねー、どうやら中国からの転校生らしいですよー」

中国、という言葉聞いて、ある友人の顔が頭に浮かんだ。

「そういやあれから一年経つのか・・・アイツ元気にしてるかな？」

「んん？急に窓の外を見てどうしたのおりむー？」

「あ、いやな、昔同じ中学だった奴が中国に引越したんだよ。それで元気にしてるかなーってさ」

「ふむふむ、もしかして彼女だったりする？」

『ツ!?!』

「・・・なんだ？今室内の空気が重くなった気がするぞ？それに背中に突き刺さるような視線を感じる・・・！」

「妙に緊張に包まれた空気にドギマギしつつも、これ以上黙っているとまずい気がしたのでのほほんさんの質問に答えた。」

「いや、ただの幼馴染だよ」

「ふくんそうなんだ」

「普通に答えただけなのに、のほほんさんが何故か生温かい目でこちらを見てくるのだが・・・。」

「これ以上この話題は藪蛇だと気付いた俺は、その眼から逃れるように別方向への修正を試みる。」

「そ、そういや中国の転校生ってどんな奴なんだろうな？クラス対抗戦に出るくらいだ

し、結構強いのかもな」

「今のところ専用機を持つてるのつて1組と4組だけだけど、油断したら負けちゃうかもよ〜?」

からかうような口調ののほほんさんに、それでも負ける気はないと言い返そうとした時、入口の方から自信に満ちた声高な声が響いてきた。

「そうね、なんせ専用機持ちのこの私が2組のクラス代表なんだから」

声の主に視線を移すと、そこには腕を組みながら仁王立ちして、こちらをニヤリと挑戦的な笑みで見上げている（・・・）見覚えのある少女がいた。

あのちっこい背丈にツインテール、それにあの自信に溢れたふてぶてしい笑みは……！

「・・・鈴? お前鈴か!？」

「久しぶりね、一夏! 今日は2組のクラス代表、鳳 鈴音として戦線布告に来たわ!」

「いや、それよりも鈴、お前そのポーズすげえ似合わねえぞ?」

「なっ! なんですつて!?!」

おお、あの猫みたいな怒り方は、やっぱり中学の頃中国に転校した幼馴染の鈴そのものだった。

久しぶりの再会を祝ってもつと話し込みたい……とこころだが、それは

もう少し後になりそうだ。

「も、もう一度言ってみなさいよ！私のポーズのどこが」

ゴツツ!!

・・・今日も千冬姉えの出席簿のキレは冴え渡ってんな。

いつの間にか周りに居たのほほんさん達も席に戻っていた。

「~~~~~ツツツ!!何すんのよ・・・げっ!」

「しばらく見ない間に随分態度がでかくなつたな、もうすぐSHの時間だが?」

「ち、千冬さん・・・」

「学園(ここ)では織斑先生だ、次からは間違えるな」

「は、はい!」

「ならとつとに戻れ、邪魔だ」

犯人が千冬姉えだと解つた途端に、先程までの勢いを失墜させる鈴。

昔からあんな感じだったけど、やっぱあいつ千冬姉えのこと苦手なのかな?

そのまま教室を出た後、一度振り向いた鈴はこちらを睨みつけてこう言った。

「今帰つてやるけど、また休み時間になつたくるからね!逃げたら許さないわよ一夏!」

「鳳・・・」

「ひうつ!?す、すいませんでした!」

その啖呵も、千冬姉えに睨まれてビビりまくった顔に変わってまるで様になつてなかつた。

逃げ去る様に教室に戻つていく姿のインパクトで忘れてたけど、そういうあいつ代表候補生になつたのか。

意外なところで再会するもんだな、まいった。

また来るって言つてたけど、積もる話もあるし昼飯にでも誘うか。

そういうヤクルヴィがまだ来てないけど、大丈夫なのか？

千冬姉えがSHを始めようとした時、自動ドア開かれて縦長い箱に足が生えたような物体が教室に入つて来た。

「……ッ!……ッ!……ッ!」フラフラブルブルッ!

「ちよつ、もしかしてクルヴィか!?!」

手首から見える種の形をしたペンダントは、クルヴィの専用機の待機状態のものだつた。

慌てて席を立つてフラフラと危なげに箱を支えながら歩くクルヴィに手を貸した。

なんとか教室の隅に箱を置き、クルヴィのおじきを受け取ってから席に戻る。

教壇の千冬姉えを見ると、頭痛を耐えるように手で額を抑えながら溜息をついてた。

どうやら呆気をとられて叱責のタイミングを逃したらしい。

そのままもう一度溜息を吐くと、千冬姉えは顔を引き締め直してSHを始めた。それにしても、あの箱の正体は今日の弁当だったりするのだろうか？

一体誰が食うんだと、その圧倒的なサイズに慄くのだった。

燃えよ愛くミズタガラシく 2

お弁当、それは恋する乙女にとって重要な意味を持つ。

主に料理が作れて家庭的という、女尊男卑の社会においても未だ根強く残る女のアイデンティティを雄弁に示せる手段として用いられることが多い。

それも好きな男性に対して、だ。

クルヴィ・エレフセリアの長大な弁当箱が示した恋する男性への好意は、同じ男性へと好意を寄せる乙女たちを震撼させるのに十分なインパクトを持っていた。

(一体いつから作っていた・・・!?あの大きさだと大量生産できる一品だけだとしても軽く5く6時間はかかるぞ・・・!?)

(なんですあの気合いの入れようは・・・!?まさかこの前の模擬戦での失態をここに来て取り返そうと言うんですの!?最近いつもに増して妙に控えめだと思つたらそういうことでしたのね・・・!)

出遅れた・・・!それが2人の己の慢心に対する後悔だった。

しかし彼女の行動は2人の想像をさらに越えてくる。

2人は失念していた。クルヴィ・エレフセリアがそこまで積極的なら、既にかの御仁

は大人の階段どころか人生の墓場へとカウントダウンを始めている。

突発的で大胆な行動が目立っているが、普段の彼女は大和撫子もかくやな控えめでいじらしい態度でアプローチを仕掛ける情緒に溢れた少女だ。

そんな彼女が、直接的な好意を外聞もなく彼に現わせるはずがないのだと言うことに。

「ふんふん、了解だよクルルルー！」

「・・・ツ！」ペコツ

「みんな〜！クルルルーがお弁当作り過ぎちゃったから、みんなと一緒に食べて欲しいって〜！」

『ツ!!!』

そうだ、こうするに決まっている。

誰のために作ったかなどあからさま過ぎるほど態度で示して置きながら、あえてそれを建前と若干の本音で優しく包み隠す。

いじらし過ぎる彼女の恋慕に、2人どころかクラス全体にまで衝撃が突き抜けた。

その時皆の頭に過ったのはただ一つの共通した思考だった。

(か、可愛い・・・！)

優しく困ったように微笑みながら、頬を淡く染めて手を静かに重ねる姿は、子猫が一

生懸命こちらを見上げてくるような錯覚を覚える。

もしこれが演技なら、彼女は相当な女優になれるだろう。

「そうだね！ちようど今月のお小遣いもピンチだったのよね！」

「私も食べたーい！」

「ハアハア・・・クルヴィさんの手作り弁当・・・ハアハア・・・」

「くっ・・・！なぜ私は今日に限ってお弁当を作ってきたの・・・！」

みんなから愛されるイジられ小動物、それが彼女の立ち位置だった。

どこかピンク色な空気が充満する中で、渦中の人物である彼がさらに波紋を広げる。

「あ、すまん。俺ちよつと一緒に食べる約束した奴がいるからさ、ごめんなクルヴィ？」

「・・・フルフルツ

『ツ!!?』

なんということだ。この男、好意に気付かないばかりか今までの彼女の苦労を全て無に帰すような所業をさらりと口にした。

しかもそれを彼女は気にしてないとばかりに柔らかく受け止める。

ああ、なんていじらしさ。その想いを足蹴する男の朴念仁さに、彼に恋する2人は憎悪をせずにはいられなかった。

「地獄に堕ちろ、一夏」

「レディからのお誘いを断るなんて、騎士にあるまじき愚行でしてよ」

「い、いや、俺も悪いと思ってるって」

「ふん、どうだかな」

「二度冬のテムズ川で頭を冷やされるといいですわ」

「うっ、本当にすまん・・・」

項垂れて明らかに落ち込んでいる様子に、2人は彼が本気で悪いと思っていると今更ながらに気付く。

少し言い過ぎたかだろうか、いや、乙女の純情を弄んだ当然の報いだ、そんな矛盾した感情が心中を掻き乱し、2人はどちらの想いも素直に現わすことができずに戸惑っていた。

その時、入口のドアが開かれ、一人の少女がタイミング悪くこの微妙な雰囲気となった教室に現れた。

「一夏！話を着けに来たわよ！」

腰に添えて胸を張りながら鳳 鈴音の言い放った言葉は、動きの止まった教室内を虚しくこだました。

鈴は妙な雰囲気となった教室を見て気付く、自分がどうやら盛大にタイミングを外した事に。

目的の人物はおろか教室全体から何の反応も返ってこない状況に、鈴は若干頬を引き攣らせる。

この妙に駄々下がりな雰囲気の中を、彼女は自らの要求を推しとおすことができるのか？

「い、一夏、約束通りお昼食へに行くわよ」

例え空気が読めようと、自分には何の関係もないとタカを括った鈴は、若干ドモリながらもそう言い切った。

ピキリッ、と何かに罅が入った音が聞こえたような気がしたが、別にそんなことはなかった、ないんだ、ないはずだ、と鈴は思った。

「鈴……」

「い、一夏……!」

「昼飯、みんなも一緒にダメかな？」

「ツ!ま、まあ、別にダメって訳じゃないけど……」

「本当か!?!ありがとう!助かったぜ鈴!」

「べ、別にあんたのためじゃないわよ!?!……私もちよつと気になることがあるしね」

「……ッ!」ペコッ

「む……」

「あら……」

普段は我が強くて推し一辺倒だがいぎとなったら空気も読めて心配りもできる女、それが鳳 鈴音だ。

一夏と共に久しぶりに会話することを楽しみにしていた鈴には一つの懸念があった。

朝一夏に会いに行つた後、自分の教室に戻る際に目撃した箱に足が生えたような謎の物体。

実際には視線の先にいる少女が巨大な箱を運んでいるだけだったのだが、何やらいい匂いの漂ってくる箱の正体と一夏の天然ジゴロっぷりが頭を過ぎり、鈴は前に一夏を見かけた時の自分の懸念が当たっていることを確信した。

よく見れば一夏の近くに侍っている女共は、あの時見かけた奴らではないか。

早急に一夏を締めあげてキリキリと吐かせるつもりだったが、こうなれば虎穴に入らずんばなんとやらだ。

直接相手の事を見極めるしかない。

出遅れたアドバンテージを取り戻すのがさらに遅れることは痛い、こちらにはまだ約束（プロポーズ）という名の強力な武器がある。

不敵に笑って意味あり気にそれぞれ視線を送ると、その意図に何となく気付いたの

か、視線を外さずに挑戦的な笑みを持って返してきた。・・・・・・約一名以外は。

一夏はようやく何となく自分の発言が爆弾を投下したのだと気付いたが、既に自ら築きあげた修羅場からは逃れられない。

後に一夏を巡る戦いの中で、“第一次恋の鞘当て合戦”と呼ばれることになる戦いが、今始まろうとしていた。

(気まずい……)

織斑一夏は時折、自分がこのような空気に放り込まれる状況を多々経験している。にも関わらず、彼は自らがその状況を作り出しているという自覚が薄い。

これに関しては、自らが女子に対して特別な態度をとっているという意識がないからだろう。

一夏にとつて女性といったら姉である織斑千冬が真っ先に思い浮かぶ。

彼女を基準にして考えた時、自分の取る態度がそこまで波紋を呼ぶことはないことを一夏は知っている。

むしろ積極的に想いを伝えた方が、彼にとつて望ましい結果を得られるのだ。

思春期真っ只中の彼は、そういう家族間の常識と世間とのギャップを学ぶ時期だ。

これからじつくりとじっくり女性関係での問題に事欠かないであろう彼がどのような成長するかは、それこそこれからの人間関係で変わってくるだろう。

自分のことを周りから好かれるだけの人間だと思うのは、あまりに傲慢であるからして。

そんな彼は、今自分の目の前で繰り広げられる乙女達の戦をどう捉えているのか？

(なんでこいつら時々仲が悪くなるんだ?)

これは仕方がないっちゃ仕方がない。

友達と思っている人物達が、自分の預かり知らぬところで勝手に意思疎通されても原因など解ろうはずもない。

まだなんとなく空気を察しているだけマシと言えるだろう。

左にはファースト幼馴染たる武士っ娘、篠ノ之箒が黙々と卵焼きを口に頬張っている。

右にはセカンド幼馴染にして元気なチャイナ娘、鳳 鈴音が唐揚げを咀嚼。

正面にはクラスメイトで友人の2人、セシリア・オルコットとクルヴィ・エレフセリアがサンドイッチと紅茶を楽しみながら時折こちらに視線を送る。

そして周りを囲むように展開するクラスメイト女子一同による包囲網。一人一人が談笑しながらも一定の注意を中心に居る一夏達に集中させている。

昼食という憩いの時間の裏には、主に一夏を巡つての水面下の戦い。

一夏がいつもの食欲を發揮するには中々緊張感の伴う食卓だ。

「ねえ、あんたがこれ作つたの?」

「……ッ!」コクコク

「ふうん、結構おいしいじゃない」

「……ッ!」ペコペコ

「当然ですわ、クルヴィさんはこのわたくしも認める立派な淑女ですよ」

「別にあんたに聞いてないし、つかあんた誰よ」

「なっ!?こ、このイギリス代表候補生であるセシリア・オルコットをご存じありませんの?」

「あたし他の国のことつてあんまり興味ないのよねー。一応国家代表くらいは覚えてるけど、候補生なんて一々覚えてられないわよ」

「な、なんですつて!」

「……ッ!」ガシィッ!

「クルヴィさん!離して下さいな!この方とは一度お話を付けなくてはなりませんの

！」

「……ッ！……ッ！」ブルブル

飾らないのは確かにいいんだが、余計に引つ掻きまわすのはやめてくれと一夏は思った。

「一夏、そろそろ説明しろ。その女はいつたい誰だ？」

お茶を飲み干した箒が、横目でジロリと睨みながら尋ねてきた。

この雰囲気箒が箒の危険信号だということを察知した一夏は、咀嚼していたご飯を飲み込み、慌てて詳細を語り始めた。

「あ、ああ、鈴は箒が転校してきた時ちようど入れ違いで転校してきたんだ。中学2年までは一緒だったから、箒はファースト幼馴染で、鈴はセカンド幼馴染ってとこかな？」

自分でもファースト、セカンドってなんだよと思いつながら、必死に口を動かす。

皺の寄った眉間にエマーゼンシーを感じる一夏だった。

「鈴、こっちは前に話したことがあったろ？篠ノ之 箒だ、仲良くしてくれ」

「へえ、あんたが噂の……。そうね、ぜひとも仲良くしていきたいわ。一夏共々（……）」

「……ッ！そうだな、こちらとも友好を結ぶことに異論はない」

好戦的な笑みを浮かべながら互いに視線を交わす2人の様子は、好意的に見れば仲良く見えるだろう。事情を察しているものには争奪戦への宣戦布告にしか見えないが。

この場合、一夏が前者で、他の者が後者だ。

しかし、争奪戦の参加者はこの2人だけではない。

正面にも2人、彼に対して彼女達と同じ感情を持つ乙女がいるのだ。

その2人がこの状況を黙って見過ごすはずがない。

「お待ちください！一夏さんはわたくしの友人、一夏さんと友好を結ぶならわたくしも手を取り合うべきでは？」

「別にいいわよ？あたしと一夏より仲良くなれるかは解らないけど」

「望むところですよ」

まずはセシリアが待ったをかけ、一夏争奪戦への参加を表明した。

鈴はこれを快く承諾し、互いにますます戦への想いをたぎらせた。

「それで？あんたはどうするの？」

「……ッ！」グッ！

どう切り出すか迷っていたクルヴィは、鈴の問いかけを受けてサムズアップで答える。

普段はホワンとのほほんさんと共に微笑んでいる顔が、いつもより引き締まって見えた。

「簡単に行くと思わないですよ？なんせこの私が居るんだから」

「フツ……それはこちらのセリフだ」

「オルコットの名にかけてお相手いたしますわ」

「……ッ！」ググッ！

乙女の戦にフェアな精神があるかどうかは知らないが、彼女達は相手を自らと同等として認め、力の限りを尽くして一夏を攻略するだろう。

そして彼女達の想い人たる織斑 一夏は……

（なんか解らんけど纏ったみたいだな。みんな千冬姉えみたいな顔してるし）

……彼に彼女達の想いを気付けさせるには、このどうしようもないシスコン基準思考をどうにかせねばならないだろう。

こうして第一次恋の鞘当て合戦は、お互いを敵として認めあうことで決着した。

彼を手に入れるという本当の決着が着くかどうかは、未だ神のみぞ知るところだろう。